

ベトナム共和国における仏教諸団体の統合と分裂

—仏教運動とナショナリズム—

金 知 雲*

The Unification and Splintering of Buddhist Associations in the Republic of Vietnam: The Buddhist Movement and Nationalism

KIM Jioon*

The Buddhist associations in the Republic of Vietnam (RVN), separated according to sects, ethnicities, and regions, were unified into one association through the Buddhist Movement in 1963. Although it did not last long and splintered shortly after, the unification marked a new chapter in the history of Buddhism in Vietnam. As a result of joint struggles against the regime's religious persecution, the Buddhist society of RVN was able to achieve solidarity and thereafter unify Buddhist associations that had been separated until then. However, each association had its respective viewpoints and attitudes towards *Phật Giáo Việt Nam* (Vietnamese Buddhism) in the light of Vietnamese nationalism. Before the unification, Mahayana Buddhist associations and Theravada Buddhist associations competed over which associations should represent *Phật Giáo Việt Nam*, and Khmer Buddhist associations in RVN felt distant from *Phật Giáo Việt Nam*. Disharmony over *Phật Giáo Việt Nam*, which seemed to be temporarily obscured during the joint struggles, remained unsolved after unification and eventually contributed to the splintering of Buddhist associations.

This paper elucidates two main points. First, it explores how the Buddhist associations achieved unification through the Buddhist Movement in 1963. Second, it explains the internal cause of splintering as the disharmony over *Phật Giáo Việt Nam*, with a specific focus on the relationship between religion and nationalism.

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科, Graduate School of Asian and African Area Studies, Kyoto University

2023年8月17日受付, 2024年1月22日受理

序 論

1963 年、ベトナム共和国 (*Việt Nam Cộng Hòa*, 南ベトナム)¹⁾において仏教諸団体はゴ・ディン・ジエム (*Ngô Đình Diệm*) 政権の仏教弾圧に抗する仏教運動 (*Phong Trào Phật Giáo*)²⁾を展開し、1964 年初めに仏教統合を成し遂げた。従来、宗派・エスニシティ・地域という諸要因によって乱立していた諸団体の統合は画期的な出来事であった。しかし、ジエム政権が倒れ弾圧がなくなると、折角成し遂げた仏教統合は間もなく瓦解してしまった。仏教運動はベトナムにおける戦争に大きな影響を与えたという点において注目されてきたが、仏教史においてどのような歴史的な意義や特徴をもっていたかはほとんど取り上げられてこなかった。本稿ではまず、先行研究とその課題を指摘し、そのうえで 1963 年の仏教運動における仏教諸団体の統合過程を明らかにする。さらに、ナショナリズムの影響を受けて出現した国名を冠した「ベトナム仏教 (*Phật Giáo Việt Nam*)」という概念に注目し、仏教統合が分裂する内在的原因を解明する。具体的には、1950 年代まで遡り、当時から存在していた「ベトナム仏教」をめぐる仏教諸団体間の考え方の違いと、そこから生じる不調和が仏教統合の裏面に潜在的分裂の芽として内在していたことを解き明かす。これをふまえ、ナショナリズムが宗教側に与えた影響、またナショナリズムに対する宗教側の反応といった宗教とナショナリズムの相互関係を考察する。

なお、本稿は主な資料としてジエム政権が崩壊した 1963 年末から翌年 1964 年の間に出版された書籍を用いた。³⁾ 仏教運動にかかわった団体や仏教徒の協力を得て出版されたこれらの資料には、当時の仏教諸団体が国内外に発信した宣言文、書信、そして写真が豊富に掲載され

- 1) ベトナム語の人名・地名・国名・各種団体名などはカタカナに借音するか、または漢字で表記する。初出の際は、日本語表記の後にベトナム語を併記する。人名の場合、初出ではフルネームとするが、ベトナムでは姓ではなく名の方で人を呼ぶため、以後姓名のうち最後の名のみ表記する。たとえば、「ゴ・ディン・ジエム (*Ngô Đình Diệm*)」は以後「ジエム」とする。ただ、「ソン・ターイ・グエン (*Sơn Thái Nguyên*)」のように、最後の名のみによる表記が分かりにくい場合、例外的にフルネームで表記する。僧侶の場合、二度目の表記から僧侶を指すティック (*Thích*, 釈)を除く名前を表記する。たとえば、「ティック・クアン・ドゥック (*Thích Quảng Đức*)」は二度目から「クアン・ドゥック」とする。また、出身地に考慮して北部弁と南部弁に分けて表記するが、既にカタカナ表記が一般化されている場合は慣例に従い、出身地が不明な場合は北部弁の発音でカタカナに借音する。*Việt Nam* の表記においては、国名の場合は慣例に従って「ベトナム」と表記するが、団体名の場合は「越南」と表記する。なお、一部の資料は音節間をハイフンで繋いでいる場合もあるが、断りが無い限り、ハイフンは取って表記する。ただ、書誌情報は原文のままにする。
- 2) ベトナム語では *Tranh Đấu của Phật Giáo* (仏教の闘争)、*Vận Động của Phật Giáo* (仏教の運動)、*Pháp Nạn* (法難) などと呼ばれ、現在では一般的に *Phong Trào Phật Giáo* (仏教運動) と称されている。ベトナム語以外の言語では仏教徒危機 (*Buddhist Crisis*)、仏教徒紛争、仏教徒抗争などと呼ばれている。
- 3) 戦争終結以降全ての出版物の没収が命じられた際、多くの人々が提出より廃棄を選び、仏教運動に関する資料も多く失われたが [Nguyen Thanh V 2006: 19–20]、仏教徒側の資料が全く入手できないわけではない。一部の資料はベトナム国外で所蔵されており、ベトナム現地でもフエクワン図書館 (*Thư Viện Huệ Quang*) という仏教系図書館が仏教徒の刊行物を影印版 (*bản ảnh in*) として再発刊しており、ホアセン図書館 (*Thư Viện Hoa Sen*) や仏教図書館 (*Thư Viện Phật Giáo*) でもデジタル化した仏教関連資料を公開している。

ており、従来の先行研究が着目してきた外交文書に現れにくい仏教徒の視点が反映されていて、1963年の仏教運動の様相、そのなかでも仏教徒側の動向が詳細に確認できる一次史料である。⁴⁾ 加えて、1963年以前の仏教諸団体の出版物と世界仏教徒連盟の資料なども利用した。

1. 先行研究とその課題

1963年の仏教運動を経て成し遂げられた仏教統合は、宗派・エスニシティ・地域によりさまざまな仏教諸団体を包摂した点において特筆するに値するが、研究者の間ではさほど注目されてこなかった。1963年から1966年にかけてベトナム共和国において盛んであった仏教運動はジエム政権の崩壊をもたらし、米国の戦争介入と民族解放運動を加速化したが、従来の先行研究はベトナム共和国の情勢の急変と抗米救国戦争 (*Cuộc kháng chiến chống Mỹ cứu nước*)、或いはベトナム戦争 (Vietnam War) という戦争に焦点を当て、仏教運動が戦争に与えた影響を明らかにしようとしてきたからである。

ベトナム近現代史の研究者であるレ・クンは1963年の仏教運動の盛り上がりの根本的な原因としてベトナム共和国における9年間のジエム政権の残酷な独裁政治を指摘し [Lê Cung 1994: 12]、さらに米国の傀儡政権とみなされたジエム政権に抵抗する仏教運動が、ベトナム民主共和国 (*Việt Nam Dân Chủ Cộng Hòa*, 北ベトナム) の人民と言論、また南ベトナム解放民族戦線 (*Mặt Trận Dân Tộc Giải Phóng Miền Nam Việt Nam*) に支持されたと論じた [Lê Cung 2007, 2013]。また、近年クンが主編し出版した『ベトナム仏教の入世精神 (1945–1975) (*Tinh Thần Nhập Thế của Phật Giáo Việt Nam (1945–1975)*)』 [Lê Cung chủ biên 2018] では、同書の目的を「1975年4月30日の燦爛かつ崇高なる目的に到達するために民族の皆が集中して成し遂げた民族解放事業 (1945–1975) における『ベトナム仏教の入世精神』を考察すること」であるとし [Lê Cung chủ biên 2018: 11]、仏教運動を単なる宗教運動ではなく、民族解放運動の一環として理解した。このような見解は、その後社会主義の勝利で幕を下ろす抗米救国戦争下、民族解放運動に仏教運動が大きく貢献したという認識に基づいており、現在のベトナム国内の学界における一般的な見解でもある。2013年6月11日に仏教界と学界の共同主催で「仏教闘争運動50年 (1963–2013)」という学術大会が行なわれ、50人近くの僧侶と学者などが参加し、歴史的背景、意義、現代社会との関係などさまざまなテー

4) 出版時期が最も早い Lan-Đình and Phương-Anh [1963] は仏教保衛連派委員会 (*Ủy Ban Liên Phái Bảo Vệ Phật Giáo*, 保衛は防衛の意, 3.1節で詳述) の資料を用いている写真集の性格が強い資料であり、Nam Thanh [1964] は統一越南仏教教会 (*Giáo Hội Phật Giáo Việt Nam Thống Nhất*, 3.4節で詳述) の幹部9人が序文を作成し、霊山研究仏学会 (*Linh Sơn Nghiên Cứu Phật Học Hội*) の当時の総書記が執筆したものである。一方、Quốc-Tuệ [1964] は仏教保衛連派委員会のチョン・ニュー・ムン・チュック (*Chon Nhu Minh Truc*) が序文を作成し、1963年の仏教運動の様相を詳細に記している。Tuệ-Giác [1964] は仏教保衛連派委員会や統一越南仏教教会の資料を用いて、さらに統一越南仏教教会の検閲を受けた後出版された。

マから仏教運動が論じられた。その成果として出版された『1963年の南部仏教運動の回顧 (Nhìn Lại Phong Trào Phật Giáo Miền Nam Năm 1963)』の冒頭では仏教運動がベトナム共和国における民族解放運動にドミノ効果をもたらしたと評価している [Trương Văn Chung *et al.* 2013: xiv]。このようにベトナム国内の学界では仏教運動が抗米救国戦争に貢献したという点については一致している。ただし、ベトナム国内での「抗米救国戦争」をめぐる記憶は国家の公的史観により統一されており、このような公的史観を批判する研究がほとんどないことに留意すべきである。ベトナムにおける歴史研究は共産党の統治の正統性に資するものでなければならない。したがって、ベトナム国内の学界では仏教運動を民族解放運動の一環として捉える以外の解釈は困難である。

一方、ベトナム国外の学界ではベトナム戦争をどのように捉えるかにより仏教運動に対しての評価が異なっている。まず、仏教運動の関係者を対象とするインタビュー調査を行なったトップミラーは、ベトナム共和国の人々は戦争を望まず、仏教徒も同様に戦争が与える影響を非常に憂えていたため、戦争を終わらせるべく危険を冒したと論じた [Topmiller 2002: x]。しかし、ジエム政権の崩壊をもたらした1963年の仏教運動に次ぎ、終戦、平和、中立主義を求めたその後の軍政期の仏教運動はむしろ戦争を拡大しようとする米国のヘゲモニーを強化したという、仏教運動の意図せぬ結果を指摘した [Topmiller 2002: 4-6]。その一方、『見捨てられた勝利 (Triumph Forsaken)』 [Moyar 2006] において米国の戦争介入やジエム政権の見直しをはかり、米国学界のオーソドクシー史観に異議を唱えようとしたモヤルは、ティック・チ・クワン (Thích Trí Quang)⁵⁾ ら仏教徒を政治僧と言い表し、仏教運動は仏教徒の政治的な支配力を獲得するためのものであったと主張した [Moyar 2004, 2006: Ch.IX]。ベトナム戦争に対してのモヤルの歴史修正主義は15人の研究者がモヤルと学術的に議論した『再考される勝利—ベトナム戦争をめぐる歴史家たちの戦い (Triumph Revisited: Historians Battle for The Vietnam war)』 [Wiest and Doidge eds. 2010] が出版されるなど反響を呼んだ一方、仏教運動に対しての関心も高め、仏教運動に関する研究を促進した [e.g. McAllister 2008; 박금표 2010]。歴史修正主義の背景とそれに対する対応にはとりわけ米国内での「ベトナム戦争」をめぐる記憶が政治的に分断されていることに関連する。米国では、「ベトナム戦争」について、誤った判断のもとで戦争に介入したという教訓が一般的である。それに対し、退役軍人や保守派の間ではこの一般的な歴史認識を否定して「ベトナム戦争」の正しさを依然として強調し、誤った判断のために勝てるはずだった戦争に敗北してしまったという歴史修正主義的な考えが根強い。これは学術的な議論の形態を装っているものの、一定数の国民に支持されやすいポ

5) 最もラディカルな中部出身の僧侶。抗仏戦争期にベトミンに加わった経歴があったために共産主義者ではないかと疑われたが、南北統一後はホーチミン市 (旧サイゴン) のアンクワン寺院 (chùa Ân Quang, 印光寺) に軟禁された。チ・クワンの軟禁に関しては Topmiller [2002: 156n22] を参照。

ピュリズム的な側面をもち、米国の世論の分断を反映したものともいえる。その結果、仏教運動という同一の事象に対しても相反する議論が展開されているのである。

上述した先行研究は仏教運動を取り上げてはいるものの、仏教運動の影響を受けた戦争における民族解放運動や米越関係の成り行きに注目するだけで、仏教統合などの仏教諸団体の動向を多方面から論じるには至らなかった。したがって、仏教運動に関しては仏教史の経緯に注目したミラーの研究が目を引き [Miller 2013: Ch.VIII, 2015]。20 世紀前半の仏教振興運動期と 1963 年の仏教運動の相互関係に注目したミラーは、仏教振興運動期から行なわれた 1) 社会参加 (social engagement), 2) 仏教中心のナショナリズム (Buddhism-centred nationalism), 3) 仏教統合の促進 (the promotion of Buddhist unity) という議論が 1963 年の仏教運動に反映されたと主張した [Miller 2015: 1910]。ミラーの議論は仏教振興運動 (*Phong Trào Chấn Hưng Phật Giáo*)⁶⁾ と 1963 年の仏教運動の関係に注目し、仏教史における 1963 年の仏教運動を位置づけようとした点で意義をもつ。

しかし、ミラーは仏教徒が決して一枚岩ではなかったという事情を看過した点において課題を残した。⁷⁾ ベトナム共和国の仏教徒は大きく大乘仏教・上座部仏教⁸⁾ という 2 つの宗派に分けられるうえに、ベトナム人・クメール人⁹⁾ というエスニシティの違いも相まってひとつにまとめることは困難であった。歴史的に大乘仏教はベトナムと共に南進 (*Nam Tiến*) したが、諸要因により北部・中部・南部の仏教は統合されておらず、大乘仏教は長らくそれぞれの地域内に概ね

6) 仏教振興運動とは 1920 年代から始まった一連の仏教改革運動を指す。今井昭夫によれば、20 世紀のベトナムにおける仏教運動は、大きく仏教振興運動 (1920 年代から 1954 年頃まで) と現代化運動 (1960 年代・1970 年代) に分けられる [今井 1999: 187-188]。仏教振興運動期には、仏教經典の翻訳および普及、布教、組織化などが図られ、同時期に結成された仏教諸団体はその後 1963 年の仏教運動の組織的動きの土台になった。

7) 仏教徒が一枚岩ではなかった事情を既に認識していた研究者としてはトップミラーが挙げられる。後述するように、1963 年の仏教運動を契機に仏教統合が成し遂げられたが、彼によれば当時の仏教界は仏教統合を経てもなお、7 つのグループに分けられていたという [Topmiller 2002: 7]。しかし、トップミラーは 7 つのグループを列挙しただけで、チ・クワンらなど比較的米越関係に大きな影響を与えた仏教徒に注目するにとどまった。また、用語に関しては Hinayana と Theravada が異なっていたことを注として記しただけで [Topmiller 2002: 155n16]、どのような違いがあったかなどに言及せず、どのような宗派或いは団体を称したのかも不明である。

8) 本稿では、引用する場合を除き、原始仏教とテーラワダ仏教を上座部仏教と表記する。ベトナムの大乗仏教徒は、自分たちの宗派を大乘 (*Đại Thừa*) や北宗 (*Bắc Tông*) とし、上座部仏教を小乗 (*Tiểu Thừa*) や南宗 (*Nam Tông*) と呼んでいたが、ベトナムの上座部仏教徒は自身の宗派を原始仏教 (*Phật Giáo Nguyên Thủy*) と呼び歴史の古さを強調し、クメール人の上座部仏教徒はテーラワダ仏教 (*Phật Giáo Theravada*) を名乗っていた。上座部仏教 (Theravada Buddhism) という用語は第一回世界仏教徒会議 (1950 年) を契機に従来の南方仏教や小乗仏教 (Hinayana Buddhism) に替わる用語として位置づけられた。上座部仏教の用語の変遷については馬場 [2022: 213-241, 255-256] に詳しい。

9) ベトナムとクメール人は異なるエスニックグループとして捉える。ベトナム人は北部ではキン人も呼ばれ、ベトナムのマジョリティである。一方、クメール人はカンボジア側からカンブチア・クロム (低地カンボジアの意) と呼ばれたメコンデルタに居住している人々で、現在のベトナム国家のなかでは少数民族のひとつとされている。

活動範囲が限定されていた。¹⁰⁾ その一方、南部は大乗仏教圏と上座部仏教圏が重なる地域であり、それぞれ北宗と南宗とも呼ばれ、2つの大きな宗派が併存してきた。南部では大乗仏教以外にもメコンデルタの先住民であるクメール人が上座部仏教を信仰しており、一部のベトナム人も原始仏教という名を以て上座部仏教徒として南部で活動していた。さらに、ベトナム共和国の時代に入ると、1954年の南北分断以降、社会主義政権を嫌った仏教徒がベトナム民主共和国から北緯17度線以南に、特にサイゴンとその周辺に避難移住したことで、¹¹⁾ 南部の仏教事情は一層複雑になった。したがって、北部から南部に細長く伸びているベトナム領内で、南部に行けば行くほど仏教形勢は多様になっていった。それに加え、20世紀前半からベトナムナショナリズムが仏教界に浸透し国名を冠した仏教諸団体が登場しはじめ、ただでさえ複雑な形勢の仏教界にベトナムナショナリズムが加わり、またそのうえに、宗派・エスニシティ・地域の要素も混じり合い、複数の異なる「ベトナム仏教」を誕生させた。本稿では、ナショナリズムの影響を受けた「ベトナム仏教」に着目し、上述したような諸要因により乱立していた仏教諸団体が、ジエム政権に抗するなか、どのように統合を成し遂げたのか、また、なぜ統合から間もなく分裂を迎えたのかを明らかにする。

10) 南進とは、ベトナム人の領土拡張過程を指す歴史用語である。紅河デルタに定住していたベトナム人が次第に南に移住し、紅河デルタから南部に細長く広がっている現在のベトナム領に居住地を広げていった過程のことを指す。また、数世紀にかけて漸進的に行なわれた南進は今日のベトナムの北部・中部・南部が異なる文化（言語や生活様式など）をもつ契機となったと指摘されている。たとえば、後期黎朝の南北分断と南北の自然環境の違いが異なる文化が生まれた原因であると指摘した劉仁善の研究があり、その他チュ・ビョンウクの研究なども挙げられる〔劉仁善 1999; 최병욱 2008〕。これらの研究は植民地期の分割統治が地域の違いを深めたとしても、「南部人に対してベトナム人としてのアイデンティティを強化した」〔劉仁善 1999: 389〕、「フランスがベトナムの支配において地域の違いを念頭においたことは確かであり、ひいてはその違いを深めた」〔최병욱 2008: 308〕と主張し、植民地期以前より既に地域の違いがあったとする立場に立つ。仏教研究においては、20世紀前半の仏教振興運動が北部・中部・南部という3地域で行なわれたとするのが定説であり、仏教振興運動期の仏教教育制度を検討したグエン・ミン・ティーの研究は植民地当局の分割統治が仏教統合の妨げとなったと捉えている〔Nguyen Minh Thi 2007: 6-7〕。しかしながら、グエン・ミン・ティーも意識しているように、異なる文化は後期黎朝の南北分断期に既にその起源があり、また3地域を統合すべきという意識は19世紀末・20世紀初めに登場したベトナムナショナリズムに密接に関係している。したがって、大乗仏教界のみの統合すら1951年に至って可能になった原因は単に分割統治にあるのではなく、また長らく仏教徒が3地域に分かれて活動したのは行政区分・自然環境・慣習の違いなどの諸要因も挙げられると考えられる。

11) 1958年の政府資料によると、定着村は南部206カ所（39万3,354人）、中部中原（*Trung phần trung nguyên*、現在のベトナムの南中部と東南部に相当）59カ所（6万1,094人）、中部高原（*Trung phần cao nguyên*）50カ所（5万4,551人）、のべ315カ所（50万8,999人）であった〔CHVN 1958: 169〕。1954年12月22日、越南仏教会（*Hội Việt Nam Phật Giáo*、北部の大乗仏教団体）の会長ブイ・ティエン・コ（*Bùi Thiện Cơ*）が当時首相だったジエム（翌年大統領に就任）に支援を要請したことを契機に、越南仏教会は移住仏教同胞代表中央委員会（*Ủy Ban Trung Ương Đại Diện Đồng Bào Phật Giáo Di Cư*）を設置し（1955年1月12日）、政府機構である避難移住総委府（*Phủ Tổng Ủy Di Cư Tị Nạn*）と共に、避難移住した仏教徒の定着に対する支援を始めた〔HVNPG 1960: 16, 36〕。越南仏教会が1955年1月から1957年8月までに集計した避難移住者の仏教徒は約13万5,000人にもものほり、主に首都圏（ジャディン11カ所、サイゴン・チョロン4カ所）に住み着き、その他、南部諸省（5カ所）と中部高原（3カ所）にも定着した〔HVNPG 1960: 17〕。

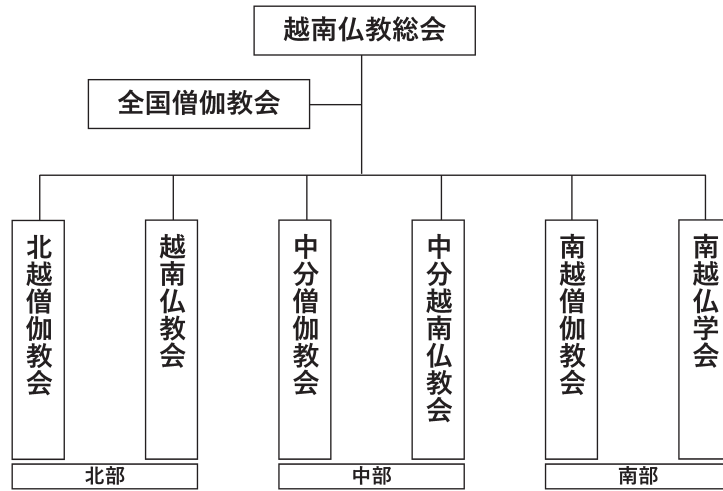


図 1 越南仏教總會

※団体名に関しては TVHQ biên soạn [2016: 536] を参照。

2. 越南仏教總會と第一次闘争

2.1 越南仏教總會

ジェム政権の仏教弾圧に抗し、1963 年の仏教運動に最も精力的に取り組んだ団体は、大乘仏教徒を統合した越南仏教總會（*Tổng Hội Phật Giáo Việt Nam*）であった。越南仏教總會は、1951 年 5 月 6 日から同月 9 日までフエのトゥーダム寺院（*chùa Từ Đàm*, 慈曇寺）に、51 人の大乘仏教徒が北部・中部・南部から集まって開催された全国仏教大会を契機に結成された [Nguyễn Lang 2000: 989; Tuệ-Giác 1964: 75]。結成当時、越南仏教總會は 3 地域ごとに 1 出家団体と 1 在家団体、合わせて 6 団体を傘下に置いたが、加えて 1952 年 9 月 8 日から同月 14 日までハノイのクワンス寺院（*chùa Quán Sứ*, 館使寺）で全国僧伽大会が開かれ、その時結成された出家団体である全国僧伽教会（*Giáo Hội Tăng Già Toàn Quốc*）¹²⁾ も加わった（図 1）。1954 年のジュネーブ協定により活動範囲が北緯 17 度線以南に縮小されたものの、北部の仏教徒の一部がベトナム共和国へ避難移住したために、越南仏教總會は形式上 3 地域を繋ぐ団体として引き続き機能することが可能であった。1962 年の段階で、越南仏教總會は傘下の出家団体に 3,000 人の僧侶と 600 人以上の尼僧を擁し、会員数は約 100 万人にのぼると宣伝したように [Mai-Thọ-Truyền 1962: 92]、1960 年代前半のベトナム共和国において最も

12) 同団体の憲章第一章第一条には「全国僧伽教会はベトナム全地域における真の僧尼の全てを含む教会であり、全国僧伽教会は越南仏教總會における重要な部分でもある」と明記されている [TVHQ biên soạn 2016: 213]。全国僧伽教会は越南僧伽教会とも呼ばれたが、本稿では全国僧伽教会に統一する。

有力な仏教団体であった。

1963年以前から越南仏教総会とジエム政権の関係は良好ではなかった。たとえば、1956年1月、仏教の祝日を増やしてほしいという越南仏教総会の求めに対し、ジエム政権は要求とは反対に釈迦誕生祭を役人と軍人の祝日一覧から除外したが、それが仏教徒の反発を買った [Lê Cung chủ biên 2018: 105]。結局、政権側が折れ、1957年4月、ジエム政権は釈迦誕生祭を祝日に指定することを通告した [Lê Cung chủ biên 2018: 106]。また、1960年5月、越南仏教総会の傘下団体である中分越南仏教会 (*Hội Phật Giáo Việt Nam tại Trung Phần*, 中分は中部の意) は「宗教が決して実行できない月ごとの活動報告など団体の煩雑な手続きを我が会が避けることができるよう、ベトナムの仏教徒の信仰の自由権が侵されないよう、民族の伝統宗教の土台が容易に発展するよう、我々のこれらの願いに大臣が共感してくれることを望む」という旨の書信を内務省大臣宛てに送った [HPGVNTP 1960: 70]。この訴えは1950年に制定された勅令第10号を受けてのことであった。勅令第10号は2人以上からなる団体の結社や運営への国家の介入を可能にしたが、宗教団体の場合、仏教は対象であったのに対し、カトリック教は対象外とされていた。¹³⁾ その後も存続した同勅令は、仏教活動に支障をきたし、仏教徒の間で仏教がジエム政権下で不公平に扱われているという認識が広がる背景になった。さらに、1960年末から1961年初めにかけて、クアンガイ省 (*Tỉnh Quảng Ngãi*)、ビンディン省 (*Tỉnh Bình Định*)、フーイエン省 (*Tỉnh Phú Yên*) などの中部地域では、カトリック教への強制改宗、誹謗、逮捕、生き埋めなど、仏教弾圧に関する事例が発生していた [Quốc-Tuệ 1964: 28-29]。¹⁴⁾ 1962年2月、越南仏教総会は代表団を派遣し真相を伝えようと大統領宛てに書信を送ったが、それを拒絶し独自の調査を行なった政権の調査は「曖昧 (*nước đôi*)」なままにとどまってしまった [Lê Cung chủ biên 2018: 107-108]。

13) 勅令第10号の条項の一部を以下に挙げる。(第1条) 団体とは、崇拜、宗教、政治、慈善、科学、文学、芸術、娯楽、青年活動、スポーツ、相互扶助などの非営利目的を追求するため、継続的に2人以上の人が知識を集め、努力を重ねるものである。(第7条) 内務大臣は…(中略)…拒否の理由などを公開せずに団体の設立の申請を拒む権利をもつ。(第10条) 団体内で委員会や行政上のいかなる変動でも地方の省長に、場合によって都市やサイゴン・チョロンでは市長に報告しなければならない。(第44条) カトリック教、キリスト教、華僑の諸集団に対しては、特別制度が後日設けられる [United Nations 1963: 86-89]。勅令第10号自体はジエム政権ではなく、1950年のバオダイ (*Bảo Đại*) 政権期に制定されたものであったが、同勅令を10年以上廃止せず、またジエム政権下でカトリック教徒が出世していった状況は、カトリック教への優遇、逆に仏教への差別と仏教徒の目に映るには十分であった。

14) たとえば、生き埋め事件の詳細に関しては以下に報告されていた。「フーイエン省トゥイーホア郡マウラム村 (*thôn Mậu Lâm quận Tuy Hòa Phú Yên*) に住むハー・ティ・ダム (*Hà thị Đàm*, 60歳) は、夫であるグエン・チュエン (*Nguyễn Chuyển*, 60歳) が社 (*xã*, 行政村) の委員会に逮捕され61年12月23日の夜に生き埋めにされた件について、フーイエン仏教省会 (*Tỉnh Hội Phật giáo Phú Yên*) に関与することを求めた。その後、夫の魂が戻ってきて夢で教えてくれたことを頼りに、ドー・ティン (*Đỗ Thim*) と共に埋められた夫の遺体を見つけた。ドー・ティンの妻であるグエン・ティ・ティエン (*Nguyễn thị Thiện*) も、仏教を信仰するという罪で夫が生き埋めにされた件について申し出た」 [Tuệ-Giác 1964: 123]。他の中部諸地域での仏教弾圧の事例に関しては Tuệ-Giác [1964: 119-124] に詳しい。

2.2 フェ殺戮事件

仏教が弾圧されているという認識が広まっていたなか、1963 年 5 月 8 日「フェ殺戮事件」¹⁵⁾ が起こり、1963 年の仏教運動の高揚の引き金となった。1963 年の釈迦誕生日を 2 日前に控えた 5 月 6 日、宗教旗の掲揚禁止、つまり仏旗¹⁶⁾ の掲揚禁止が命じられると、翌日 7 日に越南仏教総会の会主ティック・ティン・キエット (*Thích Tịnh Khiết*) など 5 人の僧侶が官庁に押し入り抗議した。¹⁷⁾ 8 日当日、釈迦誕生祭が予定どおりに行なわれるなか、ジェウデー寺院 (*chùa Diệu Đế*, 妙諦寺) からトゥーダム寺院まで行進する間、仏教徒は自分たちの願望を書いた横断幕を広げた。横断幕には「釈迦誕生を祝う仏教徒は犠牲を払わなければならぬ／とも一致して正法を守る／国際仏旗は決して蹂躪されてはならない／仏教徒は宗教平等政策を支持するのみだ／政府に宗教平等政策の施行を要求する／我々は宗教平等の主張のために戦うことを強いられるところまで来ている。我々はどうのような犠牲もいとわない／奸悪な不平等に反対する」という内容が書かれていた [Quốc-Tuệ 1964: 42-43]。釈迦誕生祭の行進と儀式が無事に終わり、夜には録音された儀式の内容がラジオ局を通じて放送される予定であった。しかしその夜、儀式の内容は放送されず、仏教徒がその理由を知るためにラジオ局に押し寄せたところ、現場にいた軍隊が仏教徒に対して発砲し、8 人の死者と多数の負傷者が出る惨事となった。

2.3 第一次闘争

フェ殺戮事件の翌日 9 日、サイゴンのサーロイ寺院 (*chùa Xá Lợi*, 舍利寺) では越南仏教総会の副会主ティック・タム・チャウ (*Thích Tâm Châu*) を中心とする会議が行なわれ、越南仏教総会の副会主の名義で『心情書』¹⁸⁾ が作成された。タム・チャウは 5 月 6 日の仏旗 (宗教旗) の掲揚禁止の電報とフェ殺戮事件に言及し、全国の僧侶と在家信徒に対して忍耐してはいけないという旨を伝えた [Quốc-Tuệ 1964: 68-70]。それから 5 月 10 日、トゥーダム寺院

15) 筆者が「フェ殺戮事件」と名付けたのは該当事件に関する仏教徒の資料の小見出し「フェにおける仏教徒の殺戮事件 (*Cuộc Sát Hại Phật Giáo Đồ Tại Huế*)」に着眼したものである [Lan-Dinh and Phương-Anh 1963: 12; Tuệ-Giác 1964: 81]。

16) 当時掲揚されていた仏旗とは、1950 年に行なわれた第一回世界仏教徒会議で承認された国際仏旗である。ベトナムでは、1951 年 5 月 13 日の釈迦誕生祭にクワンズ寺院ではじめて国際仏旗が掲揚されたという [Thích Thiện Hoa 2016 (1970): 94]。

17) 5 人の僧侶はティン・キエット、ティック・マツト・グエン (*Thích Mật Nguyên*)、チ・クワン、ティック・マツト・ヒエン (*Thích Mật Hiển*)、ティック・ティエン・シエウ (*Thích Thiện Siêu*) であった [Quốc-Tuệ 1964: 41]。他の資料によれば、マツト・グエンとティエン・シエウではなく、ティック・フエン・トン (*Thích Huyền Tôn*) とティック・タイン・チ (*Thích Thanh Trí*) などの 5 人の僧侶と、原始仏教に属する仏教徒も抗議に加わったという [Tuệ-Giác 1964: 81]。ティック・ナット・ハン (*Thích Nhất Hạnh*, 筆名はグエン・ラン (*Nguyễn Lang*)) によれば、ティン・キエットとティック・ザック・ニエン (*Thích Giác Nhiên*) が仏教代表として抗議訪問したという [Nguyễn Lang 2000: 1045]。いずれにしても越南仏教総会の会主をはじめ仏教徒が官庁に抗議に行ったことは間違いない。

18) 原題は『越南仏教総会の副会主ティック・タム・チャウ上座の心情書 (*Lá tâm thư của thượng tọa Thích Tâm Châu phó hội chủ Tổng Hội Phật Giáo Việt Nam*)』 [Quốc-Tuệ 1964: 68]。

では仏教徒の目標を知らせる『宣言文』¹⁹⁾が作成された。『宣言文』は、仏教が数千年の民族の歴史をもつ宗教であるにもかかわらず、現在不公平な方法で扱われているため、今や信仰の自由権を侵害する違憲行為に対して闘争を起こさざるを得ないとし、仏教徒は最低限の願望である「五つの願望 (Năm Nguyên Vọng)」を提案すると同時に、合理的な願望が実現される瞬間が到来するまで犠牲に耐える覚悟であると宣言した [Quốc-Tuệ 1964: 49-50]。

「五つの願望」

第一に、仏旗を滅ぼすとした電報を永遠に撤回するよう、ベトナム共和国の政府に要求する。

第二に、仏教も勅令第 10 号に記されたカトリック教への優遇措置を享受すべきと要求する。

第三に、仏教徒を逮捕したり脅迫したりする状況をやめるよう、政府に要求する。

第四に、仏教の僧侶および信徒が自由に伝道し行道〔実践、以下〔〕内は筆者による補足〕できることを要求する。

第五に、殺害された無実の人々に適切な方法で償い、殺戮の主謀者を適切に裁くことを政府に要求する。

[Quốc-Tuệ 1964: 49-50]

しかしながら、「五つの願望」という目標は定められたとはいえ、実際にどのように仏教運動を展開するかという具体的な議論はまだなされなかった。5月15日、嘉隆邸 (Dinh Gia Long) にて大統領も同席し、仏教徒と政権の間で交渉が行なわれたが、政権が逐一反論したために成果なく終わった。²⁰⁾ 政権は「五つの願望」の実現要求に対し、宗教旗の掲揚に関してはカトリック教と仏教のいずれも違法行為を犯しており、勅令第 10 号に関しては今後調査する予定であり、任意同行の中止は反乱勢力が利用する可能性があるとし、²¹⁾ 仏教の実践と布教は憲法で守られており、フエ殺戮事件の犠牲者に関しては補償する予定であると主張した [U.S Department of State 1991: 309-310]。ジエム政権の強硬な態度を確認した仏教徒は、翌日 16 日サーロイ寺院で記者会見を開き、『宣言文』を公開すると同時に仏教に対する差別と弾圧を批判し、政権の態度に対する不満を公にした [Tuệ-Giác 1964: 88]。

19) 原題は『越南仏教信徒の宣言文 (Bản tuyên ngôn của tín đồ Phật Giáo Việt Nam)』 [Quốc-Tuệ 1964: 49]。

20) 仏教徒側の参加者はタム・チャウ、ティック・ティエン・ホア (Thích Thiện Hòa)、ティック・ティエン・ホア (Thích Thiện Hoa、前のティエン・ホアとは別人)、ズン・チー (Dũng Chí)、タイン・ターイ (Thanh Thái)、チャン・チー (Chánh Trí、本名はマリー・ト・チュイン (Mai Thọ Truyền)) であった [Nam Thanh 1964: 12]。

21) 「五つの願望」の第三項に当たる内容で、ジエム政権は共産主義者の活動を防ぐために不審者を任意同行すべきだと主張したが、仏教徒は仏教弾圧を目的としているとみなしていた。この争点からは仏教徒と共産主義者の関係を疑っていたジエム政権の姿勢が読み取れる。

交渉が決裂した後、フエでは『宣言文』を補足する『付録』（5月23日）²²⁾と『付章』（5月25日）²³⁾が相次いで作成された。まず『付録』は、1) 政策改善の要求、2) カトリック教を含む誰も敵ではないこと、3) 闘争は宗教平等という理想のためであること、4) 非暴力闘争、5) 宗旨にあわない勢力との妥協は拒否することなどを述べ、再び「五つの願望」の実現を強調し、「民の、民による、民のための」大統領が仏教徒の願望を満足させることは譲歩ではないと唱え、大統領が仏教徒の願望を実現することを促した [Quốc-Tuệ 1964: 51-60]。さらに『付章』は、国家に対する仏教の貢献を述べ、社会公平に関連する宗教平等は国家に有益であり、宗教平等のための闘争が必要であると主張した [Quốc-Tuệ 1964: 61-66]。

こうして、これらの宣言文により仏教運動の目的（宗教平等）、目標（五つの願望）、方針（非暴力運動）が定められた。宣言文の作成にあたって中心的な役割を果たしたのは越南仏教総会で、²⁴⁾5月下旬から本格的に政権に働きかけ始めた仏教運動の展開においても越南仏教総会が中心となった。非暴力運動を標榜した仏教運動はハンガーストライキ、座り込み、行進などの形式で展開された。5月30日、サイゴンでは352人の仏教徒が国会の前で「五つの願望」の実現を促し、サーロイ寺院とアंकワン寺院ではそれぞれ405人と200人の仏教徒がハンガーストライキを行なった [Nam Thanh 1964: 15]。一方、フエでもサイゴンのような形式で仏教運動が行なわれたが、状況はやや違った。仏教寺院は軍人に包囲され電気と水道も遮断され、特に5月30日から6月4日の間、トゥーダム寺院では142人が怪我をし、その内69人は重傷を負った [Lan-Đinh and Phương-Anh 1963: 39]。

一方、ジエム政権は強硬策を駆使しつつ、この時点では仏教徒と対話できる窓口も設けていた。その窓口とは、副大統領グエン・ゴク・トー (Nguyễn Ngọc Thơ)、大統領府大臣グエン・

22) 原題は『フエのトゥーダムの会合で読んだベトナム仏教の「宣言文」の付録、1963年5月15日 (Bản phụ đính “Bản tuyên ngôn” của Phật Giáo Việt Nam đã đọc trong cuộc hội họp của Phật tử tại chùa Từ Đàm Huế (ngày 15-5-1963))] [Quốc-Tuệ 1964: 51]。

23) 原題は『付章：ベトナム仏教の「宣言文」の付録 (Phụ trương “Bản phụ đính về Bản tuyên ngôn” của Phật Giáo Việt Nam))] [Quốc-Tuệ 1964: 63]。

24) 『心情書』は越南仏教総会の副会主タム・チャウが作成し、またフエで作成された3通の宣言文を作成した5人の僧侶も越南仏教総会に密接に関わっており、5月6日に官庁に抗議に行った仏教徒と同一人物でもあった (注17)。そのなかで、ティン・キエット (越南仏教総会)、マット・グエン (中分僧伽教会 (Giáo Hội Tăng Già Trung Phần))、チ・クワン (中分越南仏教会) の3人は越南仏教総会とその傘下団体のメンバーであった。マット・ヒエンは1953年に中分僧伽教会の幹部を務め、1963年当時はトゥア・ティエン僧伽教会 (Giáo Hội Tăng Già Thừa Thiên) を代表して仏教運動に参加し、またティエン・シエウはトゥア・ティエン仏教省會 (Tỉnh Hội Phật Giáo Thừa Thiên) に所属していた [Thích Đồng Bổn chủ biên 2020: 179-180, 409-410]。中分越南仏教会の構造は、行政村である社 (xã) レベルの地区会 (khuôn hội) が集まって県・郡 (huyện, quận) レベルの支會 (chi hội) を成し、複数の支會が集まって省 (tỉnh) レベルの省會 (tỉnh hội) を成し、そして複数の省會が集まって中部全域を覆う中分越南仏教会を成すというピラミッド型であった。トゥア・ティエン (Thừa Thiên) は中部地域に属する省であったために、トゥア・ティエン僧伽教会とトゥア・ティエン仏教省會も中分越南仏教会の一部であったと考えられる。中分越南仏教会の構造に関しては Thích Trí-Thù [1957: 38] と Nguyễn Minh Thi [2007: 193-199] を参照。

ディン・トゥアン (Nguyễn Đình Thuần), 内務大臣ブイ・ヴァン・ルオン (Bùi Văn Lương) からなる連省委員会 (Ủy Ban Liên Bộ, 6月4日に組織) であった [The Times of Viet Nam 1963 (June 5)]. トゥアンが米国大使代理トゥルーハートに伝えた情報によれば, 6月4日と5日の交渉を通じて仏教徒と政権の間に暫定協定が結ばれ, さらに正式協定が結ばれるだろうとされていた [U.S Department of State 1991: 356–360]. ところが, 仏教徒側と政権側の認識は異なった. 「五つの願望」の懸案が十分に解決されたという話が政権側から流れると, 同交渉に参加した南越僧伽教会 (Giáo Hội Tăng Già Nam Việt) の知事長ティエン・ホア (Thiện Hoa) は, 交渉はただ意見を交換した初歩的交渉に過ぎず, その場の仏教徒はいかなる決定権ももっていなかったと主張したのである [Quốc-Tuệ 1964: 131–133]. つまり, ジェム政権と米国が仏教問題の解決の糸口を見つけたと判断していた時, 仏教徒側は政権との会話には進捗がなかったと感じていたのである.

2.4 焼身供養とその余波

交渉妥結の可能性がなくなりジェム政権の強硬な態度に苦戦していた仏教徒の状況を一瞬で変えたのは, ティック・クワン・ドゥック (Thích Quảng Đức)²⁵⁾ の焼身供養であった. 5月27日, クワン・ドゥックは信仰の自由とジェム政権の追求する価値 (民主法治, 共同, 社会同進) のために闘争しなければならないと主張し, 「五つの願望」における政府の動向が仏教徒を満足させないならば焼身供養するという旨の書信を全国僧伽教会宛てに送った [Quốc-Tuệ 1964: 94–96]. クワン・ドゥックの請願に対し, 全国僧伽教会の副治事ティック・タム・ザック (Thích Tâm Giác) は焼身供養を許可できないという旨を伝えた [Quốc-Tuệ 1964: 99]. すると, 5月30日, クワン・ドゥックは『心血の願い (Lời Nguyện Tâm Huyết)』という書信で, 「国の仏教が不安定であるのを見て, 如来の長子と命名されたひとりの修行僧としての私は, 仏法がなくなるのを放っておき静かに座って座視するわけにはいかないし, 仏教保全の方向を取り戻すために, 今の仮の体を燃やし諸仏に供養することを快く発願する」と自分の意志を明らかにした [Quốc-Tuệ 1964: 100]. 結局, 志を曲げなかったクワン・ドゥックは, 6月11日のフエ殺戮事件の犠牲者追慕式が終わった後, カンボジア代表処 (tòa Đại diện)²⁶⁾ の建物の前で結跏趺坐を組み, 身体に油をかぶって火をつけ命を落とす仏教儀式のひとつである焼

25) ラム・ヴァン・トゥック (Lâm Văn Túc, 或いは Lâm Văn Tuất, 幼名) とグエン・ヴァン・キエット (Nguyễn Văn Khiết) という俗名をもった彼は, 中部と南部で活動しながらのべ31カ所の寺の設立と修理に携わり, 3年間カンボジアで勉強したこともあった. 南越僧伽教会の副治事と儀式委員長, また南越仏学会 (Hội Phật Học Nam Việt) のフォックホア寺院 (chùa Phước Hòa, 福和寺) の住持として務めた. 履歴に関しては Nguyễn-Quỳnh [1963: 7–8] と Thích Đồng Bổn chủ biên [2020: 126] を参照.

26) 当時, ベトナム共和国とカンボジアは大使交換レベルの外交関係を結んでおらず, 1956年6月に代表処を設置し代表を派遣するにとどまっていた. その背景には中立主義を標榜したカンボジアの政策方針がある. 代表処の設立経緯に関しては Lê Hương [1971: 234–235] と Trương Đình Bạch Hồng [2014: 35–39] を参照.

身供養を行なった。²⁷⁾

仏教徒は非暴力運動ではジエム政権の武力鎮圧に敵わないと考え、外国人の特派員を通じてジエム政権の仏教弾圧を国外に知らせ、支持を得ようとした。焼身供養が計画される際、その情報は外国人の特派員にも流されていたのである。外国人の特派員たちは根拠のない話だと判断し、焼身供養の情報にあまり注目をしなかったが、サーロイ寺院のティック・ドゥック・ギェップ (Thích Đức Nghiệp) から事前に「我々は明日の朝8時に会議をする予定です。あなたは来た方がいいでしょう。おそらく非常に重要な出来事が起こるかもしれません」と言われ、時間どおりに訪れたマルコム・ブラウンだけはクアン・ドゥックの焼身供養の写真を撮影できた [Brown 1965: 175-177]。その写真が報じられると、世界世論はジエム政権の仏教弾圧を非難しはじめ、ジエム政権は仏教徒と妥協せざるを得なくなっていった。

焼身供養の後、仏教徒と政権の交渉は速やかな進展をみせた。6月14日から16日にかけて仏教代表団と連省委員会の間で会談が行なわれ、最終的に越南仏教総会の会主キエットが署名し、ジエム大統領が承認する形で『共同声明 (Thông Cáo Chung)』が6月16日に発表された。『共同声明』は「国旗—宗教旗／勅令第10号／仏教徒の逮捕と監禁の問題／伝道と布教の自由／責任と援助」の五項目からなり、それらは仏教徒が求めた「五つの願望」に対応するものであった。特に問題視された仏旗の掲揚は掲揚場所とサイズが細かく規定されたものの、仏教儀式時の仏旗の掲揚は許容された。勅令第10号においても宗教団体を対象範囲から排除する新法案が講じられることが明記された [Tuệ-Giác 1964: 166-168]。6月17日、ティン・キエットは仏教徒に『共同声明』の締結を伝え、政府が実施することを待ち日常に戻ることを勧めた [Quốc-Tuệ 1964: 144]。これを以て第一次闘争は終わり、仏教運動は一段落ついたようにみえた。

3. 仏教保衛連派委員会と第二次闘争

3.1 仏教保衛連派委員会

『共同声明』により仏教徒とジエム政権の対立は終結するかと思われたが、ジエム政権は同声明を実施することなく、仏教運動を率いた越南仏教総会の代表性を疑いさえした (後述)。このようなジエム政権の態度は仏教徒とジエム政権の対立を再び深め、仏教運動の第二次闘争が生じる契機になった。新局面に入った仏教運動の第二次闘争の特徴は、主導団体が越南仏教総会から仏教保衛連派委員会 (保衛は防衛の意) に切り替わった点である。

27) 焼身供養とは、捨身の一種類である。船山の研究によれば、中国六朝時代の捨身のなかでは焼身と分類される事例が相当数発生した [船山 2019: 399-401]。中国六朝時代の事例のほか、捨身の経典上の根拠に関しても船山 [2019: 391-458] に詳しい。また、ベトナムの事例としては、1034年、バーオ・ティン (Bảo Tính, 寶性) とミン・タム (Minh Tâm, 明心) という2人の僧侶が焼身供養を行なったという記事が『禅苑集英 (Thiền Uyển Tập Anh)』に書き記されている [Nguyễn Cuong Tu 1997: 125-126, 17b6-18a7]。

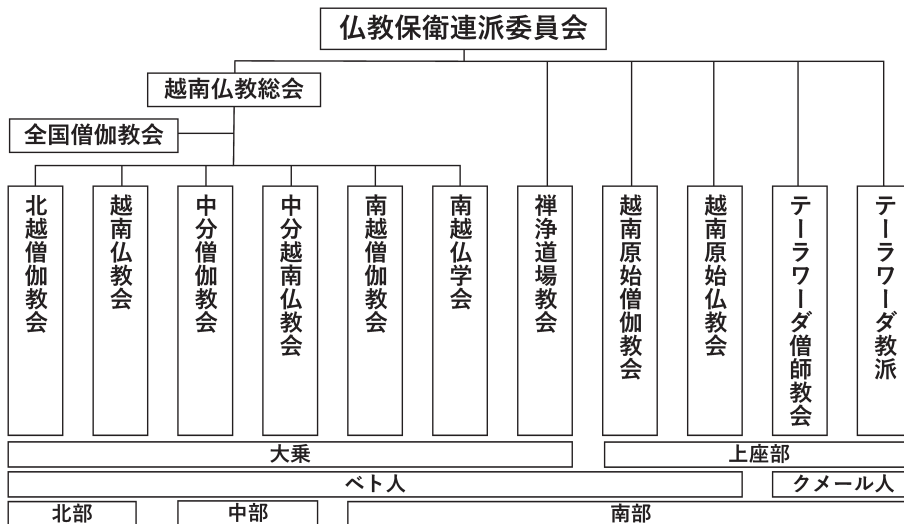


図2 仏教保衛連派委員会

*団体名に関しては TVHQ biên soạn [2016: 536] に基づき Buddhist Association of Thailand [1960: 64] と Thích Thiện Ân [1965: 78] を参照.

仏教保衛連派委員会は、ベトナムの大乗仏教9団体、ベトナムの上座部仏教2団体、そしてクメール人の上座部仏教2団体が連帯したものであった(図2)。つまり、多数派のベトナムの大乗仏教団体だけではなく少数派のベトナムとクメール人の上座部仏教団体も含むものであった。厳密に言えば、仏教保衛連派委員会は越南仏教總會のような常設機構ではなく、少数の仏教徒からなる臨時的「委員会」であったが、同委員会を構成する19人の委員が各団体の指導者であった点と、のちに結成される統一越南仏教教会の母体になった点からすれば、各団体の「連合体」に近かった。

仏教保衛連派委員会の結成日付は諸説があるが、5月下旬に結成されたと考えられる。まず、5月9日説[Nam Thanh 1964: 10]だが、フエ殺戮事件が生じた翌日に、乱立していた諸団体が志を合わせて団体を結成したとは考え難い。5月15日の嘉隆邸での会談には南宗と北宗、つまり上座部仏教と大乗仏教の高位仏教徒が仏教代表団として参加したという記録もあるが[Quốc-Tuệ 1964: 33; Tuệ-Giác 1964: 64]、この時点では「五つの願望」以外に仏教運動の具体的な方針などが定められておらず、仏教連帯に関する議論がどのくらい進んでいたかは解明できない。

ナット・ハンによれば、5月25日、越南仏教總會の会主ティン・キエットが闘争計画のために仏教諸団体の代表を召集し、その時に仏教保衛連派委員会が設立され、ティン・キエットとタム・チャウをそれぞれ最高指導者と主席にし、『宣言 (Tuyên Ngôn)』が公布された

[Nguyễn Lang 2000: 1051–1052]. 『宣言』の存在がナット・ハンの主張を裏付けているものの、仏教徒の資料によれば、ティン・キエットがサイゴンに到着したと確認されるのは早くとも6月12日であり[Nam Thanh 1964: 19], 70代の高齢者であったティン・キエットがフエでの仏教運動に取り組みながらサイゴンとフエを行き来したとは考え難い。また『宣言』ではティン・キエットの名前が記入されておらず、署名した団体のなかでも越南仏教総会の傘下団体の2団体(中分僧伽教会, 中分越南仏教会)が抜けていたことから、中部地域の仏教徒がサイゴンで行なわれる会議に参加することは困難であったことが窺える。ただ、その中部地域以外の団体が揃っていたことから、5月25日時点では仏教保衛連派委員会の輪郭はある程度固まっていたといえる。

3.2 『内務省決定』と仏教徒の対応

5月下旬に輪郭がみえた仏教保衛連派委員会が仏教運動の主体になったのは7月12日に至ってからであった。その背景には、越南仏教総会が果たして「ベトナム仏教」を代表しているのかという批判の声があった。たとえば、『共同声明』の発表から間もない6月20日に古山門仏教教会(*Giáo Hội Phật Giáo Cổ Sơn Môn*)²⁸⁾という団体が約800人の僧侶を動員した集会で、同団体は仏教運動とその運動を主導した越南仏教総会と全く関係がなく、政治に干渉しないと宣言した[The Times of Viet Nam 1963 (June 21)]. 古山門仏教教会の主張は、「ベトナム仏教」はひとつにまとまっておらず、これまでの仏教運動は越南仏教総会という一団体による運動に過ぎなかったということであった。それに対し、越南仏教総会の会主は大統領と副大統領宛ての書信で、古山門仏教教会は公権機構の支援により組織されたものであると主張し、古山門仏教教会と政権の癒着関係を疑った[Quốc-Tuệ 1964: 156; The Times of Viet Nam 1963 (July 2)].

7月9日には『内務省決定(Nghị Định của Bộ Nội Vụ)』が発表され、「(第一条)越南仏教総会のために、仏教儀礼日における仏旗の掲揚方法が次のように決定された／(第二条)半旗の場合、越南仏教総会は寺院内で掲揚すること／(第三条)越南仏教総会に属する仏教徒の車はいかなる旗も掲揚しないこと／(第四条)越南仏教総会の体系に属する信徒の私宅において、宅前では寺院の前のように国旗と仏旗を掲揚し、宅内では仏旗のみ掲揚すること」など仏旗に関する規定が決められた[Quốc-Tuệ 1964: 178–179]. 『内務省決定』の仏旗の掲揚方式自体は『共同声明』の内容とあまり変わりがなかったが、適用対象を「仏教徒」から「越南仏教総会」に入れ替えたという点において大きな違いがあった。これは越南仏教総会を強調することにより、仏教運動が全仏教徒の望みを反映した運動ではなく、一団体に過ぎない越南仏教

28) 古山門仏教教会は1963年6月12日に結成されたという[Thích Đồng Bổn chủ biên 1995: 761]. 同団体の結成背景には政権との癒着の疑いもあり、同時に仏教の社会参加或いは政治参加に対して批判的態度を堅持した仏教徒が存在していたことも考えられる。

総会によるものであったと主張したいというジエム政権の意向を反映したものであった。

仏教徒の期待に反する『内務省決定』が発表されると、仏教徒は政権に対する不信感を隠さなかった。7月12日に仏教保衛連派委員会の名で作成された『建議 (Kiến Nghị)』は、『内務省決定』に反対の意を表すと同時に、大乘仏教団体、ベトナムの上座部仏教団体、クメール人の上座部仏教団体が連合した仏教保衛連派委員会が仏教運動を主導してきたと主張した [Quốc-Tuệ 1964: 180-183]。加えて、従来、越南仏教総会の肩書を以て仏教運動を率いたティン・キエットとタム・チャウは、それぞれ仏教保衛連派委員会の最高指導者と主席として仏教徒に第二次闘争への参加を呼び掛けた。7月14日、ティン・キエットは『共同声明』の実施を求める非暴力闘争を展開することを全国の仏教徒とジエム大統領に知らせ、タム・チャウは仏教保衛連派委員会が仏教運動を継続することを決定したと各級指導者に伝えた [Quốc-Tuệ 1964: 192-197]。

3.3 第二次闘争と仏教保衛連派委員会の瓦解

こうして、仏教保衛連派委員会が全面に出て第二次闘争が始まった。サイゴンのサーロイ寺院の周囲は仏教徒と政権が対立・衝突する場になり、全国各地で焼身供養が行なわれた。²⁹⁾ しかし7月中旬から8月中旬まで行なわれた第二次闘争は、さらに強硬となったジエム政権を前にして成果をあげることができなかった。ジエム政権は「人民団体 (*đoàn thể nhân dân*) と同様に、僧尼界、公職者、教授、学生における反乱分子と過激派は断固として粛清する」という「洪水計画 (*kế hoạch nước lũ*)」を実施し、8月20日から21日にかけての夜間に仏教寺院の掃討作戦を行ない、その結果、各地の仏教寺院が軍隊に襲撃され、サイゴンとフエでは仏教徒を含む逮捕者は1,323人にのぼった [Lê Cung chủ biên 2018: 134]。また、寺院捜索で多くの僧侶がベトコンの活動に加担したことを証明する武器と資料を発見したとジエム政権は主張し [Quốc-Tuệ 1964: 396]、それにより仏教徒は容共勢力とみなされるようにさえた。

この過程で、仏教保衛連派委員会の加盟団体が相次いで脱会し、同団体は瓦解するに至った。8月22日、クメールの上座部仏教徒であるラム・エム (*Lâm Em*) とソン・ターイ・グエン (*Sơn Thái Nguyên*) は「仏教保衛連派委員会による闘争が宗教的意味合いを失った」と述べ、「上座部仏教徒は共産主義のためにしかない、意味のない行動に仏教徒を導こうとする政治的煽動家たちの計画に反対する」と表明し、仏教保衛連派委員会との決別を宣言した [The Times of Viet Nam 1963a (August 27)]。8月24日、全国僧伽教会のティック・ザック・ドゥック (*Thích Giác Đức*) は、仏教徒に「仏教の威信を格下げしかねないいかなる不法行動

29) 8月初旬、ジエム大統領の義妹であるマダム・ニュー (*Madame Nhu*, 本名はチャン・レ・スアン (*Trần Lệ Xuân*)) はマスコミとのインタビューで焼身供養を「バーベキュー」と皮肉ったが、それにより世論は悪化し、対米関係にも悪影響を与えた。さらにその発言以降、焼身供養は改めて再開され、8月4件、9月1件、10月2件が行なわれ、1963年の仏教運動の間に行なわれた焼身供養の数は8件にのぼる。焼身供養の統計は Thích Thiện Hoa [2016 (1970): 104-111] を参照。

にも参加しないこと」を求めた [The Times of Viet Nam 1963b (August 27)]. 8 月 25 日、ベトナムの上座部仏教徒の指導者であるブー・チョン (*Buu Chon*) は政府が『共同声明』を誠実に実施したと述べ、仏教保衛連派委員会からの脱退を告げた [The Times of Viet Nam 1963c (August 27)]. 同日、中部地域のフエとトゥア・ティエン省の仏教徒は、ジエム政権はどの宗教に対しても弾圧や差別を行なったことがないと主張し、政権に対し仏教運動を政治目的に利用する者に厳しく対処することを求めた [The Times of Viet Nam 1963d (August 27)]. さらに 8 月 26 日、ついにティン・キエットまでもが、逮捕された仏教徒が大統領の寛容に恵まれることを願い、現状に関しては他の 4 人の仏教徒に委任し、自分は一線から退くと表明した [The Times of Viet Nam 1963e (August 27)]. この一連の脱会騒動とティン・キエットの屈服に関する記事は 8 月 27 日付の『ザ・タイムズ・オブ・ベトナム』に記載された。政権の立場を代弁していた同紙がジエム政権の強硬策の正当性を誇張しようとしていたことを考慮しても、仏教保衛連派委員会がジエム政権の強硬な姿勢に屈し瓦解してしまったことは間違いない。これを以て、組織的に闘争を展開することは不可能となり、第二次闘争はほぼ崩壊した。

3.4 統一越南仏教教会の結成

8 月下旬以降続いた仏教保衛連派委員会の瓦解状態は 1963 年 11 月 1 日の軍部クーデターを契機に一変した。1963 年当時、仏教運動が引き起こされて以来の政治的不安定を解消しなかった米国と、仏教徒に譲歩するわけにはいかなかったジエム政権の関係は次第に悪化していった。とりわけ、8 月の仏教寺院の掃討作戦により仏教保衛連派委員会が瓦解状態に陥りジエム政権が仏教徒に勝利したようにもみえたが、同事件がきっかけとなりジエム政権に対する米国の態度が変わった。ミラーによれば、ジエム政権初期の 1955 年、ジエム政権は反乱勢力に対して譲歩せよという米国の助言を無視して反乱勢力を武力鎮圧したのだが、その結果、米国から政治的支持を得たという経験があった。そのため、ジエム政権はその経験をもって仏教寺院の掃討作戦を行なったが、ジエム政権の予想とは異なり、早くも 8 月 24 日から米国の態度が変化しはじめたのである [Miller 2013: 277-278, 290-291]。それと同時に、以前からジエム政権に対する不満が高まっていた軍部のなかではクーデター計画が具体化され、古田元夫が論じたように、軍部の「将軍たちの間でクーデターの計画が準備されるようになり」、米国はそれに対して「公然とクーデターを支持はしないが阻止もしないということで、将軍たちの動きに実質的に青信号を出すことになった」[古田 1991: 24]。そして軍部がクーデターを行なうとジエム政権は瞬く間に崩壊したのである。³⁰⁾

政権崩壊後、諸団体の再糾合を図った仏教徒は、仏教保衛連派委員会という仏教連帯のレベルを超え、統一越南仏教教会という正式団体の結成に急速に移行していった。11 月 4 日、2 ヶ

30) 本稿は仏教運動のなかの仏教徒とその諸団体の動向に焦点を当てているため、ジエム政権の崩壊の詳細に関しては割愛した。ジエム政権の崩壊の過程に関しては Miller [2013: Ch.IX] に詳しい。

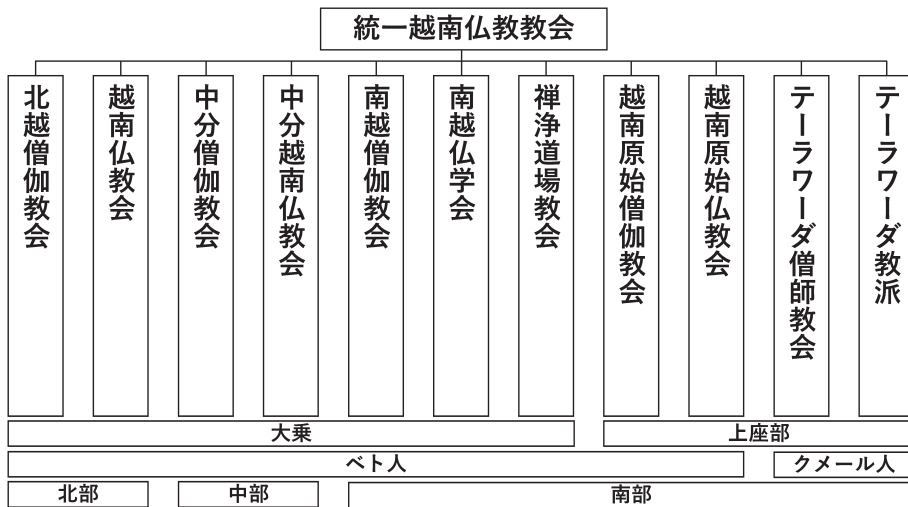


図3 統一越南仏教教会

*団体名に関してはTVHQ biên soạn [2016: 536] に基づき Buddhist Association of Thailand [1960: 64] を参照。ナット・ハンによれば、越南仏教総会の傘下団体は統一越南仏教教会が結成されてから解体されたという [Nguyễn Lang 2000: 1123]。しかし、南越仏学会に関しては1964年以降にも活動していたことが確認できた。図3はどのような団体が統一越南仏教教会に加わっていたかを示している。

月ぶりにサーロイ寺院で仏教保衛連派委員会の幹部たちが再会すると、ティン・キエットは「8月20日夜、〔仏教保衛〕連派委員会の皆はひとりずつ連行されて誰にも会えなくなった。しかし、外では青年、学生、そして軍隊と一緒に参加し闘争を勝利で終わらせて、今日の再会の日を迎えることができた」とこの間の状況を幹部たちに説明した [Tuệ-Giác 1964: 118]。そして11月6日、ティン・キエットとタム・チャウの名義で、「〔越南仏教〕総会と〔仏教保衛〕連派委員会以外、誰もこの2つの組織から許可を得たり委任されない限り、仏教の名を以て宣言したり活動したりする権利と資格はない」と声明を出した [Nam Thanh 1964: 49]。

さらに、1963年12月31日から1964年1月2日にかけてベトナム仏教統一大会が開かれ、タム・チャウは「仏教徒の隊伍〔仏教諸団体の形勢〕を組織することが不可欠である」と強調し、またベトナムの上座部仏教徒であるファップ・チ (Pháp Tri) は「統一とは単に法理上の統一であり、意志と行動はかつてから統一していた」と述べ、既に仏教界は団結していると唱えた [Nam Thanh 1964: 51]。このように仏教統合の課題が重視されるなか、大乘仏教と上座部仏教、両派を統合した統一越南仏教教会が結成された (図3)。1964年1月4日に作成された統一越南仏教教会の憲章の冒頭は「仏陀の教理にある平和の理想を公布する、ベトナムにおける2つの仏教宗派（北宗と南宗）は人類と民族に奉仕するためにかつてから抱いていた実際の統一の願望を実現した」と明らかにした [TVHQ biên soạn 2016: 525]。

4. 「ベトナム仏教」をめぐる不調和

4.1 統合と分裂

1963 年の仏教運動の盛り上がりのなかで共闘を経て成し遂げられた仏教諸団体の統合であったが、ジエム政権期に次ぐ軍政期に再び政治・社会的影響力をもとうとした統一越南仏教教会による仏教運動は、内部分裂により 1963 年の仏教運動のような影響力を発揮することはできなかった。禅浄道場教会 (*Giáo Hội Thiền Tịnh Đạo Trường*) などが仏教の政治参加を批判し統一越南仏教教会から離脱して越南仏教総教会 (*Tổng Giáo Hội Phật Giáo Việt Nam*) を結成する一方で、³¹⁾ 統一越南仏教教会では内部で争いが起きていた。同団体の要職はベト人の大乘仏教徒が占めていたが、³²⁾ そのなかで北部出身のタム・チャウと中部出身のチ・クワンがそれぞれクオック寺院 (*Quốc Tự*, 国寺) とアンクワン寺院を拠点として大乘仏教徒間の派閥対立を強めていたのである。³³⁾ また、少数派であった上座部仏教徒に関して、公式に統一越南仏教教会との決別を告げた資料は見当たらないものの、³⁴⁾ 上座部仏教徒は統一越南仏教教会の活動にこだわっておらず、独自の活動を行ない続けた。たとえば、ベト人の上座部仏教徒は統一越南仏教教会とは別にベトナムの上座部仏教徒として世界仏教徒会議に参加し、³⁵⁾ クメール

31) 大乘仏教団体の禅浄道場教会などが結成した越南仏教総教会は、公民としての政治参加とは別に、仏教の名を以て政治に参加することに反対したが [TVHQ biên soạn 2016: 518]、その批判対象は統一越南仏教教会であった。

32) 統一越南仏教教会の要職ポストに就いた 18 人の内、ベト人の大乘仏教徒が 13 人であり、その内実は越南仏教総教会出身の仏教徒が優位を占めていた。要職ポストは僧統院の幹部 (8 人) と化道院の幹部 (4 人)、そして総務総委員級以上の幹部 (6 人) とした。要職ポストの一覧に関しては TVHQ biên soạn [2016: 537] を参照。

33) 大乘仏教徒間の派閥対立において、ライバル関係とみなされたタム・チャウらとチ・クワンらの関係がよく指摘されている。トップミラーによれば、タム・チャウらが親政権的かつ反中立主義に立ったのに対して、チ・クワンらはベトナム共和国と南ベトナム解放民族戦線が連立政権 (coalition government) を結成して戦争を終結させることを望んでおり、このような中立主義をめぐる対立が統一越南仏教教会内から生じる分裂の争点であったという [Topmiller 2002: 7]。しかしトップミラーも意識していたように、出身地域の違いは大乘仏教徒間の派閥対立に影響を与えていた。たとえば、タム・チャウは共産主義者が占領した北部から避難移住した北部出身であり、チ・クワンはベトミンに参加した経歴ももち、分断の影響を他の地域より大きく受けた中部出身であった。戦争に対する態度は地域によって異なる経験に影響されたと思われる。加えて、南部出身の仏教徒の動向も注目に値する。統一越南仏教教会結成時、化道院の副院長に就任したマーイ・ト・チュインは同団体の組織に対する意見不一致でわずか 1 ヶ月後辞任し、南越仏学会の会長の職に戻ったという [Thích Đồng Bổn chủ biên 1995: 966-967]。さらに 1971 年の統一越南仏教教会が出版した書籍では南越仏学会が統一越南仏教教会と別の仏教団体と認識されていた [Thích Thiện Hoa 2017 (1971): 4]。具体的にどのような不一致があったのか、現時点では不明なものの、南部の仏教徒の離脱は統一越南仏教教会の大乘仏教徒の間には地域的違いにより軋轢或いは対立が生じていたことを傍証しているといえる。

34) ただし、ベト人の上座部仏教団体である越南原始僧伽教会は 1967 年時点で統一越南仏教教会に加わっていなかったようである。越南原始僧伽教会がベトナム共和国政府に送った 1967 年 5 月 10 日の文書では、統一越南仏教教会にはもう参加していないと述べ、同年 1 月 3 日の文書 (số 205-VP/GHTG) においても既に伝えたとしているが [TTLTQG II 33-29866: 174]、その文書は筆者の調査では今のところ見つからず、継続して調査中である。

35) たとえば、第 7 回世界仏教徒会議 (インドにて開催、1964 年) や第 8 回世界仏教徒会議 (タイにて開催、1966 年) などの事例が該当する [TTLTQG II 33-29363: 31; World Fellowship of Buddhists 1967: 99]。

人の上座部仏教徒は少数民族としてのクメール人の処遇問題に取り組んでいった。³⁶⁾ その結果、独自の活動により上座部仏教徒の存在感が薄くなるなか、大乘仏教徒の派閥性が強まり、統一越南仏教教会が展開する仏教運動は1963年の仏教運動のように統一的な動きをみせることができなかった。勢力が弱まったため、一部の派閥による政治運動とみなされ、内部分裂に陥っていく。

このように統一越南仏教教会が分裂していく過程では「ベトナム仏教」という概念をめぐる考え方の違いがあった。後述するように、ベトナム人の仏教徒はベトナムナショナリズムの影響を受け国名を冠した「ベトナム仏教」という概念に違和感をもたなかったが、ベトナム人の大乘仏教徒と上座部仏教徒との間には「ベトナム仏教」の代表をめぐる競合関係が存在した。さらに、「ベトナム仏教」に対しての親近感や距離感、つまり「ベトナム仏教」に対する帰属意識は、ベトナム人とクメール人というエスニシティの違いにより異なっていた。「ベトナム仏教」において両宗派が併存を越え共存できるか、また国名を冠する「ベトナム仏教」に共感できるかという問題は、ジエム政権の仏教弾圧が引き起こした危機感により一時的に覆い隠されていたが、ジエム政権崩壊後、共闘の経験を経て急速に仏教統合を成し遂げたにもかかわらず、ほどなくして再燃したのである。

本稿で大乘仏教徒間の派閥対立よりも、国名を冠した「ベトナム仏教」をめぐる不調和という事象に注目する理由は、仏教とナショナリズムの関係について検討するためであり、それによって、ベトナムにおける仏教の特徴を明らかにできると考えたためである。ジエム政権末期から軍政期にかけての時期に限定してみれば、仏教運動は宗教と国家の対立であったとはいえ、ジエム政権崩壊後は、大乘仏教徒間の派閥対立により分裂したとみることはできる。しかし、より長い時間軸で仏教運動をみると、仏教運動は宗教と国家の対立であるだけではなく、多様な仏教徒が例外的にベトナムで仏教統合を成し遂げた契機であったことが分かる。東南アジア大陸部に目を向けてみると、カンボジア、ラオス、タイ、ミャンマーでは、多数派である上座部仏教が国教、或いは国教に相当する地位を占めており、仏教がそれぞれの国家と緊密な関係で結びついていた。それに比べ、上座部仏教から大乘仏教にグラデーションをもちながら変移していくベトナムの仏教徒の分布では、大乘仏教徒が多数派とはいえ、上座部仏教徒も無視できない人口規模であった。そのうえ、国民国家が形成されていくなかでも、他の東南アジア大陸部の国家とは異なり、ベトナムにおける仏教は国家にとっての国民統合の手段にならなかった。そして、後述するように「ベトナム仏教」への統合の動向は全くなかったわけではな

36) たとえば、1965年4月、クメール人の上座部仏教徒はバーリ語教育機関が不在であるため、カンボジアに行かなければならない状況を訴え、バーリ語教育機関として中学校と高等教育機関の設立に対する政権の支援を求めている [TILTQG II 31-562: 22-25]。このような働きかけは統一越南仏教教会が担う仏教運動の目標ではなく、カンボジアの影響力から脱してベトナム共和国内で自立しようとしたクメール人の上座部仏教徒の政治的な動きであった。このようなクメール人の政治的な動きの背景と展開に関しては4.4節で述べる。

いが、仏教統合を急展開させたのはジエム政権の仏教弾圧に対抗した1963年の仏教運動であった。仏教連帯を経て成し遂げられた仏教統合は、その期間は短かったが、大乘仏教と上座部仏教を統合し、ベト人の上座部仏教徒とクメール人の上座部仏教徒も参入した点において、今日の「ベトナム仏教」の枠組みを最初に作り上げた画期的な出来事であり、東南アジアの仏教において「ベトナム仏教」の特殊性を表す事例であることは間違いない。大乘仏教圏と上座部仏教圏に跨る「ベトナム仏教」の特殊性とその形成過程を理解するうえで、「ベトナム仏教」をめぐる不調和は注目するに値するといえよう。

以下では、1950年代まで遡り、ベト人の大乘仏教徒、ベト人の上座部仏教徒、クメール人の上座部仏教徒それぞれが「ベトナム仏教」をどのように捉えていたのかを論じ、その考え方の違いによる不調和が分裂の芽として統一越南仏教教会という仏教を統合した団体に既に内在していたことを明らかにする。

4.2 大乘仏教徒にとっての「ベトナム仏教」

1963年時点でベトナム共和国内の最大規模の仏教団体であり、ベト人の大乘仏教を代表する団体であった越南仏教総会にとっての「ベトナム仏教」は、ベト人の大乘仏教が他宗派より一貫して優位であり、中心的役割を果たすべきものであった。越南仏教総会結成の契機になったティック・トー・リエン (Thích Tố Liên) の第1回世界仏教徒会議 (スリランカにて開催) 参加時の逸話からは、ベト人の大乘仏教徒の「ベトナム仏教」に対する捉え方が窺える。³⁷⁾ 1950年、世界仏教徒連盟の第1回世界仏教徒会議に参加するベトナム国 (Việt Nam Quốc Gia) の代表として選ばれたトー・リエンは、同行者であるタイック・ビック (Thạch Bích) がカンボジア僧侶風の衣服を着ている様子を見て次のように述べた。

ベトナム仏教の僧侶が足りないというのか、なぜカンボジア僧侶をベトナムの仏教代表団に選ばなければならないのか？ 仏教が肌色や人種を区別しないとはいえ、世間の側に立って論じれば、国体 (quốc thể) のために肌色と人種を区別しなければならない。ベトナムの仏教代表団にカンボジア僧侶がいると、人々は〔ベトナムの仏教代表団を〕越棉 (Việt-Mên)³⁸⁾ やインドシナ連邦の仏教代表団だと思ってしまうかもしれないので、これは必ず避けるべきだ [Tố Liên 1950: 21-22]。

タイック・ビックが少数民族を代表する僧侶として選ばれ、ベトナムの国籍ももっており、カンボジアの僧侶と共に修行していると聞き、トー・リエンは最終的には納得し同行することにした [Tố Liên 1950: 22]。しかし、第1回世界仏教徒会議に参加した際、ベトナムがカン

37) トー・リエンの逸話の和訳はTố Liên [1950]に基づきNgo Hoang Duc [2015: 283, 297-298]も参照。

38) 越南 (Việt Nam) と、カンボジアを指す高棉 (Cao Miên, 或いはCao Mên) の合成語。

ボジア、ラオスと共に「インドシナ仏教」に括られると、トー・リエンは「ベトナムはインドシナ連邦の国家ではなく独立国であり、〔世界仏教徒連盟の〕憲章に従って世界仏教徒会議に参加するベトナムの仏教代表団を任命する権利がある」と主張し承認を得た〔Tô Liên 1950: 231〕。「ベトナム仏教」は「カンボジア仏教」と異なると考え、ベトナムはインドシナ連邦の一部ではなく独立国であると唱えたことは、トー・リエンの意識のなかにベトナムナショナリズムが強く存在し、彼自身の「ベトナム仏教」の構成要素にはクメール人と上座部仏教は含まれていなかったことが推測できる。

仏領期、ベトナムの北部・中部・南部ではベトナム人の大乘仏教徒がそれぞれの地域で仏教改革を目指して活動していたが、トー・リエンの第1回世界仏教徒会議の参加以後、浮上した仏教統合という課題はようやく1951年に越南仏教総会の結成により具現化した。³⁹⁾ 越南仏教総会の『設立宣言文』⁴⁰⁾ は次のように同団体の結成の背景と意義を表明した。

北から南に下った僧侶たちと信徒たちは釈迦牟尼で満たされた帰依心をもち、慈悲と喜捨の精神のなかで生活し、常に和平の樹立に気を配ってきた。しかし、俗事は望みと一体とならず、昔の環境は境界を三分に分けたため、仏法は常に不変であるにもかかわらず、仏事もまた縁に従わなければならなかった。…（中略）… 今が有利な機縁であり、全てのベトナム仏教は統一されるべきである〔THPGVN 1958: 20-21〕。

この短文からは、ベトナム人と大乘仏教が歴史的に紅河デルタから南部に向かって拡大していったという南進意識と共に、地理的環境のため北部・中部・南部で仏教徒が別々に活動してきたこと、そして1951年の現在こそが仏教統合に最適な時期であるという認識が読み取れる。また、「ベトナム仏教」という国名を冠した団体名を唱え、越南仏教総会を構成した仏教徒がベトナム人の大乘仏教徒であった点も考慮すると、トー・リエンの捉え方のように、越南仏教総会もベトナムナショナリズムに影響され、ベトナム人の大乘仏教を「ベトナム仏教」として認識していたことが分かる。

1954年、南北分断により越南仏教総会の活動範囲は南半分のベトナム共和国の領土内に縮小されてしまった。北緯17度線以北から一部の仏教徒がベトナム共和国に避難移住したため、形式上3地域の仏教徒を繋ぐ仏教団体として越南仏教総会は機能したが、同時にベトナム共和国領内に居住する上座部仏教徒を意識せざるを得なくなった。ベトナム民主共和国に残った

39) 1950年、北部のトー・リエンはベトナムにおける仏教諸団体を統合した形態で世界仏教徒連盟に加盟することを希望し、中部のチ・クワンはベトナムの政治的状況の変化に注目し今が仏教統合の適期であると主張した〔Ngo Hoang Duc 2015: 298-303〕。

40) 原題は『ベトナム仏教代表大会の越南仏教総会設立の宣言文（*Bản tuyên ngôn thành lập Tổng Hội Phật Giáo Việt Nam của đại hội đại biểu Phật Giáo Việt Nam*）〕〔THPGVN 1958: 20〕。

仏教徒とは分断されてしまい、越南仏教総会の努力では解決できない問題となっていたが、上座部仏教徒の存在はそうではなかったためである。したがって、越南仏教総会は上座部仏教徒を自分たちの団体に引き込もうとした。たとえば、1956年、越南仏教総会団体の月刊誌『越南仏教 (Phật Giáo Việt Nam)』に同団体の名で記載された「統一の話 (Câu Chuyện Thống Nhất)」では次のように呼び掛けていた。

越南仏教総会は同道の集団を迎えるために、両手を広げなければならない。越南仏教総会はベトナムの仏教徒の大家庭になるべきだ。事実、[越南仏教] 総会における各集団の現在の大団結に、何よりも理解を示すべきであり、統一の礎石において誤解を招くことと損傷を与えることを常に避けるべきだ。[越南仏教] 総会の外にある各集団は一そのなかでも原始仏教[上座部仏教]の全ての各集団は一また、「和合」の実現が最も緊迫していること、つまり現段階において最も重要であることを認識すべきだ [THPGVN 1956: 5]。

上座部仏教徒への呼び掛けは、分断という想定外の事態に出くわした大乘仏教徒が、小さくなった活動範囲内で相対的に影響力が大きくなった上座部仏教徒を包摂しようとした試みであった。その一方、上座部仏教を同道の集団と呼びながらも、両手を広げる大家庭である越南仏教総会の傘下に上座部仏教徒が入るよう促した表現は、両宗派を同等な関係とみなさず、大乘仏教が上座部仏教を包み込むべきという優越的態度を表していたといえる。

4.3 ベトナムの上座部仏教徒にとっての「ベトナム仏教」

越南仏教総会が自分たちを「ベトナム仏教」の大家庭であると認識していた一方、ベトナムの上座部仏教徒も自身を「ベトナム仏教」の一員であると自認していた。ブー・チョンらベトナムの上座部仏教徒は、越南仏教総会とベトナム民主共和国の大乘仏教徒と共に、1956年の第4回世界仏教徒会議（ネパールにて開催）に「ベトナム仏教」の代表として参加した [Thích-Minh-Châu 1957: 23]。1958年の第5回世界仏教徒会議（タイにて開催）においてはベトナムの上座部仏教徒が「ベトナム仏教」の代表として「ベトナム仏教」の事情を報告し、報告者ヴァンサラキタ (Vansarakkhita, ベトナム名はホ・トン (Hộ Tông)) は、越南原始仏教会 (Hội Phật-Giáo Nguyên-Thủy Việt-Nam, ママ) と越南原始僧伽教会 (Giao-Hôk Tang-Già Nguyên-Thủy Việt-nam, ママ) がベトナム共和国に承認され活動していることを世界の仏教徒に知らせた [Buddhist Association of Thailand 1960: 64]。このように「ベトナム仏教」の代表として参加し、国名を冠した団体名で活動した点は、ベトナムの大乘仏教徒と同じく、ベトナムの上座部仏教徒の認識にベトナムナショナリズムが反映されていたことを傍証する。

しかし、大乘仏教徒と同様にベトナムナショナリズムの影響を受けたとはいえ、ベトナムの上座部仏教徒の「ベトナム仏教」に対する捉え方は大乘仏教徒と完全に同一であったわけではな

かった。第5回世界仏教徒会議でホ・トンが、「ベトナム仏教」の現状に対して、大乘仏教徒が多数派である一方、上座部仏教は自身とナーガー・テーラ (*Naga Thera*, ベトナム名はブー・チョン) によってカンボジア、ビルマ、スリランカから導入されたと報告したように [Buddhist Association of Thailand 1960: 64], ベトナムの上座部仏教徒は自分たちの教理がカンボジアをはじめ東南アジア大陸部とスリランカから由来したものと認識していた。同時に信仰実践において東南アジア大陸部との繋がりが密接で、とりわけ地理的にカンボジアとの往来は盛んであった。カンボジアとの交流の背景には、ベトナムとカンボジアが仏領インドシナに組み込まれた19世紀後半以降、多くのベトナム人がカンボジアに移住し、彼らによってカンボジア内で越僑社会が拡大されたことにある。越僑はホ・トンがプノンペンに開いたスンフォック寺院 (*chùa Sùng Phước*) でベトナム語を通じて上座部仏教を学んだり、或いはカンボジア寺院に通ってクメール語で上座部仏教を学んでいた [Lê Hương 1971: 123]。ベトナムの上座部仏教徒が20世紀前半に出家していたことを考慮すると、その後の世代以降の越僑はベトナム語だけではなくクメール語でも上座部仏教の経典を学ぶことができ、言語の壁を容易に克服できたと考えられる。よって、グエン・ヴァン・ヒーウ (*Nguyễn Văn Hiếu*)、ホ・トン、ブー・チョン、ティック・ホ・ヤック (*Thích Hộ Giác*)、ファップ・チらベトナムの上座部仏教徒が、カンボジアで出家していたことはこのような背景があつてのことであつた。⁴¹⁾

その一方、1958年の第5回世界仏教徒会議での報告によれば、ベトナム共和国における上座部仏教の僧侶は25人、沙弥は20人を超えておらず、寺院もたったの10カ所であつた [Buddhist Association of Thailand 1960: 64]。この報告は、不利な環境にあつたベトナム共和国国内の上座部仏教徒の状況を表す一方、提示された数値からは明らかにクメール人の上座部仏教徒が排除されていることが分かる。つまりこの報告から、ベトナムの上座部仏教徒がクメール人の上座部仏教徒を「ベトナム仏教」の一員として認識していなかったことが窺えるのである。

4.4 クメール人の上座部仏教にとっての「ベトナム仏教」

宗派に関係なくベトナム人の仏教徒は自らが信仰する仏教が「ベトナム仏教」であると認識していたのに対し、クメール人の上座部仏教徒は自身を「ベトナム仏教」の一員であるとは認識していなかった。かつてのコーチシナ、そのなかでもメコンデルタは、少なくとも18世紀半ばから次第にベトナム領に組み込まれたが、19世紀後半から20世紀半ばまでのフランスの植民地支配下で、カンボジアとコーチシナ間の往来に不自由はなく、メコンデルタに定住していたクメール人の上座部仏教徒はカンボジアと緊密な関係を結んでいた。たとえば、各省ではサンガ律会議 (*Hội Đồng Kỷ Luật Sư Sai*, ママ) がカンボジアの仏教界と交流を行ない、コーチシ

41) 出家履歴は Thích Đồng Bồn chủ biên [2020] を参照。

ナ・カンボジア人道德・知識・身体改善協会 (*Liên Đoàn Cải Thiện Tinh Thần, Trí Đức và Thể Dục của Người Cao Miên ở Nam Kỳ*, 1938 年または 1940 年) とコーチシナ仏教研究所支部 (*Phân Bộ Địa Phương của Viện Phật Học ở Nam Kỳ*, 1943 年) の結成後, カンボジア王室からの支援を受けるなど [Lê Hương 1969: 166–167], クメール人の上座部仏教徒はカンボジアと宗教的かつ政治的に密接な関係をもっていた。⁴²⁾

1963 年の仏教運動に参加した団体は, カンボジア王室と繋がっていた前述の仏教団体ではなく, カンボジア王室のシハヌーク (*Sihanouk*) に抵抗した仏教団体であった。1957 年, ソン・ターイ・グエンにより結成されたテーラワダ教派 (*Giáo Phái Theravada*) は「プノンペンを頂点とする仏教研究所支部に代わる」団体として結成されたが [下條 2021: 279], この団体が単なる宗教団体であったとはみなし難い。シハヌーク政権に対抗する「自由クメール (*Khmer Serei*)」を率いたソン・ゴック・タン (*Son Ngoc Thanh*) と兄弟関係であったソン・ターイ・グエンは, ベトナム共和国内のクメール人の処遇問題に関わり, サイゴンの上座部仏教寺院を拠点として「自由クメール」のメンバーを募集し, さらにジエム政権の支援を受けてメコンデルタで活動して兄ソン・ゴック・タンの活動を補っていたのである [下條 2021: 184–185; Jagel 2023: 92, 102; U.S Department of State 1994: 263n.4]。

このように, テーラワダ教派は, 政治面においてベトナム共和国内のクメール人処遇問題に取り組み, また 1963 年の仏教運動を経て統一越南仏教教会の一員になったことでクメール人の上座部仏教徒の代表と位置づけられたが,⁴³⁾ その政治的活躍とは裏腹にテーラワダ教派がクメール人の上座部仏教徒を十分に代表していたとは言い難い。なぜなら, 各省では依然としてカンボジアの仏教界と結びついたサンガ律会議が存在していたためである [Lê Hương 1969: 171]。ただ, クメール人の上座部仏教徒はカンボジアとの繋がりが深く, ベトナムに対する帰属意識が薄かった点においては共通していた。したがって, ベト人の仏教徒が当然のように「ベトナム仏教」を冠したのに対し, クメール人の仏教徒がそうではなかったのはこのような「ベトナム仏教」に対する距離感があったからであると考えられる。つまり, ベト人の仏教徒はクメール人の仏教徒を「ベトナム仏教」から排除していたが, クメール人の仏教徒自身も「ベトナム仏教」の一員であるという認識はもてずにいたといえる。

4.5 「ベトナム仏教」をめぐる不調和

前述したように, 仏教諸団体の「ベトナム仏教」に対する考え方は各々の立場により異なっていたが, さらに 1950 年代から 1963 年の間, ベト人の仏教徒間で「ベトナム仏教」の代表

42) 団体名の和訳においては, ベトナム語とフランス語の名称を確認した下條 [2021: 168–169, 188] を参照。また, コーチシナ・カンボジア人道德・知識・身体改善協会の設立年度においては, 1940 年説 [Lê Hương 1969: 167] と 1938 年説 [下條 2021: 189n.44] が存在する。

43) もうひとつの団体, テーラワダ僧師教会 (*Giáo Hội Tăng Sĩ Theravada*) の結成経緯は不明であるが, テーラワダ教派を在家団体とし, 出家団体としてテーラワダ僧師教会を設けたと考えられる。

をめぐる競合が続いており、クメール人の仏教徒はそこから距離を置くという状況が続いていた。まず、「ベトナム仏教」の代表をめぐる競合において、ベトナムの大乗仏教徒は歴史的にも古く人口規模においてもベトナムの上座部仏教徒を圧倒していたが、世界の仏教徒の視点からみれば、ベトナムの上座部仏教徒は大乗仏教徒に押されてはいなかった。越南仏教総会は絶えず「ベトナム仏教」を代表していると自称したものの、世界仏教徒連盟と同団体が主催する世界仏教徒会議ではベトナムの上座部仏教徒の活躍が目立ち、越南仏教総会はベトナムの上座部仏教徒を無視できない状況にあった。たとえば、1958年の第5回世界仏教徒会議ではホ・トンが「ベトナム仏教」の代表として出席しただけではなく、ブー・チョンが1959-1960年の世界仏教徒連盟の副会長（*Vice-President*）として選ばれた [Buddhist Association of Thailand 1960: 64, 114]。また日本仏教界の資料によれば、1963年以前にはベトナムの世界仏教徒連盟の地域センターの住所はベトナムの上座部仏教の拠点寺院であるサイゴン所在の *Jetavana-Vihara* (*Kỳ Viên Tự*, 祇園寺) となっていた [仏教大年鑑刊行会 1960: 737; 全日本仏教会 1962: 189]。さらに、ベトナムの仏教団体としては上座部仏教の1団体と大乗仏教の2団体が挙げられ、仏教関係者の人名名簿には16人の内少なくとも3人が上座部仏教徒であったことが確認できた [仏教大年鑑刊行会 1960: 740, 746]。ベトナムの大乗仏教の圧倒的な規模を考慮すると、世界におけるベトナムの上座部仏教徒の活躍は著しかったといえる。

それに対し、ベトナムの大乗仏教徒はベトナムの上座部仏教徒の存在を意識し牽制した。たとえば、1962年に出版された『越南仏教 (*Le Bouddhisme au Vietnam・Buddhism in Vietnam・Phật-Giáo Việt-Nam*)』で、当時越南仏教総会の副会主であった著者マーイ・ト・チュインは越南仏教総会を、「最も緊密に組織され、唯一活動し、同時に唯一ベトナムの千年仏教の土台を代表する全ての資格を公式に承認された最も重要な団体」であると位置づけた [Mai-Tho-Truyền 1962: 92]。チュインが同書をベトナム語だけではなく、フランス語と英語でも書いたのは、単にベトナム人だけではなく、世界の人々にも向けてベトナムの大乗仏教の偉容を誇り、越南仏教総会の位置づけをはっきりとさせるためであったと考えられる。加えて、1963年6月、米国中央情報局は大乗仏教団体と上座部仏教団体が競合し、チュインとブー・チョンがライバル関係を成していたにもかかわらず、上座部仏教徒がジエム政権に抗する越南仏教総会の運動を支持していることを把握していた [Central Intelligence Agency 1963: 3]。ジエム政権の仏教弾圧により、「ベトナム仏教」の代表をめぐる両宗派の争いは、外見上、下火となった。しかし、この米国中央情報局の認識は仏教連帯が形成されてはいたものの、依然として両宗派間の不和が生じる可能性は潜在していたことを傍証する。

その一方で、クメール人の上座部仏教徒が「ベトナム仏教」をめぐる主導権争いに加わった痕跡は見当たらない。テラワダ教派の活動から窺えるように、「ベトナム仏教」に距離感を感じ帰属意識が薄かったことが関連しているだろう。そのような状況で、テラワダ教派

が仏教保衛連派委員会に参加したということは注目に値する。表面上、ベト人の仏教徒が多数を占め、のちに統一越南仏教教会の母体になる仏教保衛連派委員会にテラワダ教派が参加したことは、「ベトナム仏教」の枠内にクメール人の上座部仏教徒が包摂されたようにもみえる。しかし、1963 年 5 月下旬は「ベトナム仏教」に対する考え方に関係なく、ジエム政権に對抗して仏教を防衛するため、諸団体を網羅し糾合することが喫緊の課題であった。ジエム政権の仏教弾圧がもたらした危機感のなか、仏教連帯が図られ、テラワダ教派もこのような状況で仏教保衛連派委員会に参加したのである。また、仏教保衛連派委員会の発足と関連する『宣言』ではクメール人の上座部仏教徒団体の署名に「クメール系ベトナム人 (*người Việt gốc Miên*)」が付記された [Quốc-Tuệ 1964: 74]。この表現はベトナム共和国内のクメール人を指す行政用語でもあったが、あえて『宣言』で用いられたことは、ベト人の仏教徒が圧倒的に多い仏教保衛連派委員会の構成のなかで、テラワダ教派が独自のアイデンティティを保持していたことを傍証する。そして、テラワダ教派が仏教保衛連派委員会への参加に次ぎ、「ベトナム仏教」を冠した統一越南仏教教会に参加したのも独自のアイデンティティの保持の観点から理解できる。前述したように、ソン・ターイ・グエンはクメール人の処遇問題や反シハヌーク運動に取り組んでおり、下條によれば、軍政期のテラワダ教派は「カンボジアから独立した、南ベトナム独自のクメール系上座部仏教の統括組織の構築」を志向していた [下條 2021: 280]。統一越南仏教教会への参加は、あたかも「ベトナム仏教」の枠組みに包摂されたようにもみえるが、ソン・ターイ・グエンらテラワダ教派の活動からみれば、統一越南仏教教会の影響力を以てベトナム共和国内のクメール人の上座部仏教徒を代表することが狙いであったことが分かる。

よって、ベト人の仏教徒間の競合関係は收拾できず、さらにクメール人の上座部仏教徒には自分たちを「ベトナム仏教」の一員として認識していない者も多くいる状況で、統一越南仏教教会は結成され、「ベトナム仏教」を「統一」したと謳ったのである。視点を変えれば、ジエム政権の仏教弾圧下で「ベトナム仏教」をめぐる不調和は一時的に覆い隠されただけであって、ジエム政権の消滅後、この不調和が再び現れたのは必然的であった。戦争がより激化する最中に有力な僧侶を中心に派閥が形成されたが、同一団体で活動する限り少数派の上座部仏教徒の存在感は薄くならざるを得ず、そのうえ統一越南仏教教会が率いる仏教運動がベトナムナショナリズムに傾いていくなか、クメール人の上座部仏教徒にとって仏教運動に参加する動機が不足していったのも当然のことであった。したがって、「ベトナム仏教」をめぐる不調和という問題は統一越南仏教教会に当初から分裂の芽として内在し、その後同団体が分裂する内在的原因になったといえる。

結 論

本稿では、1963年の仏教運動の過程のなかで、仏教諸団体が統合し、その後まもなく分裂する内在的原因を明らかにした。以下では、1963年の仏教運動の歴史的な意義を論じ、20世紀のベトナムにおける宗教とナショナリズムの関係を考察することでまとめとしたい。

1963年の仏教運動を経て結成された統一越南仏教教会は、ベトナム史上はじめて大乘仏教と上座部仏教を統合した団体であり、その点において1963年の仏教運動は歴史的意義をもつ。1963年の仏教運動以前、宗派に加えエスニシティ・地域という諸要因が絡み合って、仏教諸団体は乱立している状況であった。このような仏教事情は、ジエム政権の仏教弾圧に抗して盛り上がった1963年の仏教運動を経て急変した。1963年5月8日のフエ殺戮事件を契機に、5月25日に仏教保衛連派委員会が結成され、仏教徒の連帯は強固なものになった。そして11月1日軍部のクーデターでジエム政権が倒れてほどなく、仏教保衛連派委員会を母体とする統一越南仏教教会を結成して仏教統合を成し遂げたのである。この仏教統合は分断状況下で南側の仏教諸団体のみではあったものの、諸要因によって乱立していた諸団体を統合した点においてはベトナム仏教史に新たな一ページを刻んだといえる。

しかし、統一越南仏教教会の結成という仏教統合には、当初から分裂の芽が潜んでいた。統合以前、ベトナムナショナリズムに影響されたベトナム人の大乘仏教徒と上座部仏教徒が「ベトナム仏教」の代表をめぐる競争を繰り広げる一方、クメール人の上座部仏教徒は「ベトナム仏教」への帰属意識が薄く、その競争から距離を置いていた。そして、共闘の経験は「ベトナム仏教」を「統一」する統一越南仏教教会の結成の契機になったが、「ベトナム仏教」をめぐる不調和はジエム政権の仏教弾圧を前にして覆い隠されただけで、依然として存在していたのである。その結果、ジエム政権の仏教弾圧という外発的要因により可能になった仏教統合は、ジエム政権が打倒されると間もなく瓦解した。

その一方、「ベトナム仏教」をめぐる不調和は、宗教とナショナリズムの相互関係がさまざまであることを示唆する。とりわけ、仏教がナショナリズムに規定されていく20世紀半ばのベトナムにおいて、ナショナリズムが仏教界に与えた影響と、それに対応する仏教界の反応は実に多様であった。そして宗派とエスニシティはその相互関係を決定する重要な尺度であり、さらに地域的には大乘仏教圏と上座部仏教圏が重なる南部において多様な相互関係がみられた。したがって、ベトナムにおける宗教とナショナリズムの相互関係には、宗派、エスニシティ、地域という宗教側の個別アクターの事情が深く関係していたことが分かる。このような本稿の考察は、「ベトナム仏教」を新たに理解する観点を提供し、東南アジア大陸部の仏教との比較研究にユニークな事例を提供できると考えられる。ただし、本稿は大乘仏教徒内の地域的派閥や、南部のホアハオ仏教 (*Phật Giáo Hòa Hảo*) や華人の仏教などさらに重要なアク

ターを論じず、時間軸も 1963 年を中心に 1950 年代から 1960 年代半ばの仏教諸団体の動向にとどまったという点で課題を残した。本稿の考察が宗教とナショナリズムの多種多様な相互関係の解明に貢献することを期待し、さらにアクターと時間軸を拡大して 20 世紀のベトナムにおける宗教とナショナリズムの関係を解明することを今後の課題にしたい。

引用文献

日本語文献

- 今井昭夫. 1999. 「社会主義ベトナムにおける宗教と政治—国家公認宗教団体を通して」『Quadrante』1: 184–206.
- 下條尚志. 2021. 『国家の「余白」—メコンデルタ 生き残りの社会史』京都大学学術出版会.
- 全日本仏教会. 1962. 『全仏必携 昭和 37 年度版』全日本仏教会.
- 古田元夫. 1991. 『歴史としてのベトナム戦争』大月書店.
- 船山 徹. 2019. 『六朝隋唐仏教展開史』法蔵館.
- 仏教大年鑑刊行会. 1960. 『仏教大年鑑 1961』仏教大年鑑刊行会.
- 馬場紀寿. 2022. 『仏教の正統と異端—パーリ・コスモポリスの成立』東京大学出版会.

ベトナム語文献

- ※ CHVN: Cộng-Hòa Việt-Nam [ベトナム共和国] の略
- ※ HPGVNTP: Hội Phật-Giáo Việt-Nam tại Trung-Phần [中分越南仏教会] の略
- ※ HVNPG: Hội Việt-Nam Phật-Giáo [越南仏教会] の略
- ※ THPGVN: Tổng-Hội Phật-Giáo Việt-Nam [越南仏教総会] の略
- ※ TVHQ: Thư Viện Huệ Quang [フエクワン図書館] の略
- ※ TP.HCM: Thành phố Hồ Chí Minh [ホーチミン市] の略
- ※ TTLTQG II: Trung Tâm Lưu Trữ Quốc Gia 2 [第二国家文書館] の略
- ※ 影印版の場合、括弧の中の数字は原本の初出年度を表す

第二国家文書館所蔵資料

- TTLTQG II. 31-562. *Về tổ chức và Hoạt Động của Giáo Phái Phật Giáo Theravada (Nam Tông) Năm 1964–1967*. [1964 年から 1967 年の間におけるテーラワダ教派（南宗）の組織と活動について].
- _____. 33-29363. *Về Hội Nghị Phật Giáo Thế Giới tại Ấn Độ năm 1964* [1964 年のインドにおける世界仏教徒会議について].
- _____. 33-29866. *Về Hoạt Động của Phật Giáo Theravada (Nam Tông, Giáo Hội Phật Giáo Nguyên Thủy, Người Việt Gốc Miên) Năm 1963–1967* [1964 年から 1967 年の間におけるテーラワダ教派（南宗、原始仏教教会、クメール系ベトナム人）の活動について].

刊行文献

- CHVN. 1958. *Cuộc di-cư lịch-sử tại Việt-Nam* [ベトナムにおける移住の歴史]. Sài Gòn: Phủ Tổng-Ủy Di-Cư Tị Nạn.
- HPGVNTP. 1960. Bức thư của hòa-thượng hội-trưởng P.G.T.P [中分仏教会長和尚の書信], *Liên Hoa* 5: 69–70. <<https://thuvienphatgiao.com/application/uploads/book/TapChiLienHoa-NamThu6-So05.pdf>>
- HVNPG. 1960. *Tập kỷ yếu Hội Việt-Nam Phật-Giáo: Phật sự tiến-hành tại miền Nam* [越南仏教会の紀要集].

- 南部における仏事の進行]. Sài Gòn: Hội Quán Trung-Ương Chùa Phước-Hòa.
- Lan-Đình and Phương-Anh. 1963. *Lửa-thiêng đạo mầu: lược sử Phật Giáo đồ đầu tranh chống kỳ-thị tôn giáo* [聖なる火, 神秘的道—宗教差別に対する仏教徒闘争の略史]. Sài Gòn: [s.n.].
- Lê Cung. 1994. Tìm hiểu những sự kiện đầu tiên trong phong trào Phật giáo miền Nam 1963 [1963 年の南部仏教運動の初期事件についての考察], *Nghiên Cứu Lịch Sử* 275: 8–12.
- . 2007. Sự hậu thuẫn của miền Bắc đối với phong trào Phật Giáo miền Nam Việt Nam năm 1963 [1963 年のベトナム南部仏教運動に対する北部の支持], *Nghiên cứu Tôn giáo* 48: 41–47.
- . 2013. Sự hậu thuẫn của Mặt Trận Dân Tộc Giải Phóng Miền Nam Việt Nam Với Phong Trào Phật Giáo Năm 1963 [1963 年のベトナム南部仏教運動に対する南ベトナム解放民族戦線の支持], *Nghiên cứu Tôn giáo* 122: 39–46.
- Lê Cung chủ biên. 2018. *Tinh Thần Nhập Thế của Phật Giáo Việt Nam (1945–1975)* [ベトナム仏教の入世精神 (1945–1975)]. TP.HCM: Nhà Xuất Bản Tổng Hợp TP.HCM.
- Lê Hương. 1969. *Người Việt Gốc Miên* [クメール系ベトナム人]. Saigon: [s.n.].
- . 1971. *Việt kiều ở Campuchia* [カンブチアにおける越僑]. Sài Gòn: Trí Đăng.
- Mai-Thọ-Truyền. 1962. *Le Buddhism au Vietnam·Buddhism in Vietnam·Phật-Giáo Việt-Nam* [ベトナム仏教]. Sài Gòn: Pagoda Xa Loi.
- Nam Thanh. 1964. *Cuộc tranh đấu lịch sử của Phật Giáo Việt-Nam* [ベトナム仏教の歴史的な闘争]. [s.l.]: [s.n.].
- Nguyễn Lang. 2000. *Việt Nam Phật Giáo sử luận I-II-III* [ベトナム仏教史論 I・II・III]. Hà Nội: Nhà Xuất Bản Văn Học.
- Nguyễn-Quỳnh. 1963. *Ánh sáng từ-bi: cuốn tiểu sử cổ hòa-thượng Thích-Quảng-Đức, người tranh đấu đầu tiên, cho năm nguyện vọng Phật Giáo Việt-Nam* [慈悲の光—ベトナム仏教徒の五つの願望のための最初の闘争者, ティック・クアン・ドゥック和尚の伝記]. Sài Gòn: [s.n.].
- Quốc-Tuệ. 1964. *Công cuộc tranh đấu của Phật-Giáo Việt-Nam: từ Phật Đản đến Cách Mạng 1963* [ベトナム仏教の闘争—釈迦誕生時から 1963 年革命まで]. [s.l.]: [s.n.].
- Thích Đồng Bổn chủ biên. 1995. *Tiểu Sử Danh Tăng Việt Nam Thế Kỷ XX - Tập I* [20 世紀越南名僧小史]. TP.HCM: Thành Hội Phật Giáo TP.HCM.
- . 2020. *Nhân vật Phật Giáo Việt Nam (Phật Giáo nhân vật chí) 1800–2017* [ベトナム仏教人物 (仏教人物誌) 1800–2017]. California: Nhà Xuất Bản Ananda Viet Foundation.
- Thích Minh-Châu. 1957. Phong Trào Phật-Giáo [仏 教 運 動], *Phật-Giáo Việt-Nam* 7: 23–26. <<https://thuvienhoasen.org/images/file/Ifv5XwTv0wgQAA0Q/phet-giao-viet-nam-1956-07.pdf>>
- Thích Thiện Ân. 1965. *Phật-giáo Việt-Nam xưa & nay: bài giảng trong chuyến công-du tại Hoa-kỳ và Nhật-bản* [ベトナム仏教の昨日と今日—米国と日本における公務の間の講義]. Sài Gòn: Đông Phương.
- Thích Thiện Hoa. 2016 (1970). *50 Năm Chấn Hưng Phật-Giáo Việt Nam - Tập I* [ベトナム仏教振興運動 50 年 第一巻]. bản ảnh ấn [影印版]. TP.HCM: TVHQ.
- . 2017 (1971). *Phật-Giáo Việt-Nam Ngày Nay hay là 50 Năm Chấn Hưng Phật-giáo Việt Nam - Tập II* [今日のベトナム仏教・ベトナム仏教振興 50 年 第二巻]. bản ảnh ấn [影印版]. TP.HCM: TVHQ.
- Thích Trí-Thù. 1957. Bức thư [便 り], *Liên Hoa* 6: 38. <https://thuvienphatgiaio.com/application/uploads/book/TapChiLienHoa-NamThu3-PL2520_So6.pdf>
- THPGVN. 1956. Câu chuyện thống nhất [統一の話], *Phật-Giáo Việt-Nam* 3: 3–5. <<https://thuvienhoasen.org/images/file/IZi9agPv0wgQACN7/phet-giao-viet-nam-1956-03.pdf>>
- . 1958. Bản tuyên-ngôn thành-lập Tổng-Hội Phật-Giáo Việt-Nam của đại-hội đại-biểu Phật-giáo

- Việt-Nam [ベトナム仏教代表大会の越南仏教総会設立の宣言文], *Phật-Giáo Việt-Nam* 20&21: 20–21.
(<https://thuvienhoasen.org/images/file/pEDvvQzv0wgQANkL/phat-giao-viet-nam-1956-20-21.pdf>)
- Tổ Liên. 1950. *Kỷ sự phái đoàn Phật giáo Việt Nam đi Ấn Độ và Tích Lan: Cuộc Hội nghị Phật giáo thế giới tại Colombo từ ngày 25/5 đến 8/6/1950* [インドとセイロンに行くベトナムの仏教代表団の記事—1952年5月25日から1950年6月8日までのコロンボにおける世界仏教徒会議]. Hà Nội: Đuốc-Tuệ.
- Trương Đình Bạch Hồng. 2014. *Quan hệ ngoại giao giữa Việt Nam Cộng Hòa và Cambodia trong giai đoạn 1954–1970* [1954年～1970年におけるベトナム共和国とカンボジアの外交関係]. Hòa Kỳ: Hồng Trương Books.
- Trương Văn Chung, Nguyễn Công Lý and Thích Nhật Từ chủ biên. 2013. *Nhìn lại phong trào Phật Giáo miền Nam năm 1963* [1963年の南部仏教運動の回顧]. TP.HCM: Nhà Xuất Bản Phương Đông.
- Tuệ-Giác. 1964. *Việt-Nam Phật-Giáo tranh-đấu sử* [ベトナム闘争史]. Sài Gòn: Hoa-Nghiêm.
- TVHQ biên soạn. 2016. *Tuyển tập điều lệ - quy chế - hiến chương Phật Giáo Việt Nam* [ベトナム仏教の条例・規制・憲章における選集]. TP.HCM: TVHQ.

英語文献

- Brown, M. 1965. *The New Face of War: A Report on A Communist Guerilla Campaign*. London: Cassell.
- Buddhist Association of Thailand. 1960. *Report of the Fifth General Conference of the World Fellowship of Buddhists, Bangkok, Thailand, 24–30th November B.E.2501 (1958)*. Bangkok: Buddhist Association of Thailand.
- Central Intelligence Agency. 1963. *The Buddhists in South Vietnam*. (<https://www.cia.gov/readingroom/docs/CIA-RDP79-00927A004100030002-4.pdf>)
- Jagel, M. 2023. *Khmer Nationalist: Son Ngoc Thanh, the CIA, and the Transformation of Cambodia*. Ithaca, New York: Cornell University Press.
- McAllister, J. 2008. 'Only Religions Count in Vietnam': Thích Tri Quang and the Vietnam War, *Modern Asian Studies* 42(4): 751–782.
- Miller, E. 2013. *Misalliance: Ngo Dinh Diem, the United States, and the fate of South Vietnam*. Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press.
- _____. 2015. Religious Revival and the Politics of Nation Building: Reinterpreting the 1963 'Buddhist crisis' in South Vietnam, *Modern Asian Studies* 49(6): 1903–1962.
- Moyar, M. 2004. Political Monks: The Militant Buddhist Movement during the Vietnam War, *Modern Asian Studies* 38(4): 749–784.
- _____. 2006. *Triumph Forsaken: the Vietnam War, 1954–1965*. Cambridge&New York: Cambridge University Press.
- Ngo Hoang Duc. 2015. *Building a New House for the Buddha: Buddhist Social Engagement and Revival in Vietnam, 1927–1951*. Doctoral dissertation, University of Washington.
- Nguyen Cuong Tu. 1997. *Zen in Medieval Vietnam: A Study and Translation of The Thiền Uyển Tập Anh*. Honolulu: University of Hawai'i Press.
- Nguyen Minh Thi. 2007. *Buddhist Monastic Education and Regional Revival Movements in Early Twentieth Century Vietnam*. Doctoral dissertation, University of Wisconsin-Madison.
- Nguyen Thanh V. 2006. *Vietnamese Buddhist Movements for Peace and Social Transformation, 1963–1966*. Doctoral dissertation, Saybrook Graduate School and Research Center.
- Topmiller, R. 2002. *The Lotus Unleashed: The Buddhist Peace Movement in South Vietnam, 1964–1966*.

- Lexington, Kentucky: University Press of Kentucky.
- United Nations. 1963. *Report of the United Nations Fact-Finding Mission to South Viet-Nam*. <<https://digitallibrary.un.org/record/729703?ln=en>>
- U.S Department of State. 1991. *Foreign Relations of the United States 1961–1963, Vol III, Vietnam January–August 1963*. Washington: United States Government Printing Office. <<https://history.state.gov/historicaldocuments/frus1961-63v03>>
- _____. 1994. *Foreign Relations of the United States, 1961–1963, Vol XXIII, Southeast Asia*. Washington: United States Government Printing Office. <<https://history.state.gov/historicaldocuments/frus1961-63v23>>
- Wiest, A. and M. Doidge eds. 2010. *Triumph Revisited: Historians Battle for the Vietnam War*. New York: Routledge.
- World Fellowship of Buddhists. 1967. *Reports on the General Council Meeting, Bangkok, Thailand, 4 November 2509/1966 and the Eighth General Conference, Chiangmai, Thailand, 6–11 November 2509/1966 of the World Fellowship of Buddhists*. Bangkok: Choom Noom Chang.

韓国語文献

- 박금표. 2010. 「베트남 근대화에 미친 불교의 영향—베트남 전쟁과 불교도 항쟁을 중심으로」 [베트남의近代化における仏教の影響—ベトナム戦争と仏教徒抗争を中心に] 『韓國禪學』 26: 555–600.
- 劉仁善. 1999. 「베트남인의 南進과 南部文化의 形成」 [베트남人の南進と南部文化の形成] 『동방학지』 105: 331–394.
- 최병욱. 2008. 「20 세기 통일 베트남 만들기—지역주의의 충돌과 극복」 [20 世紀の統一ベトナムづくり—地域主義の衝突と克服] 『한국학연구』 18: 301–328.

新聞

- The Times of Viet Nam*. 1963 (June 5). Gov't Committee to Study Measures on Religious Issue.
- _____. 1963 (June 21). Co Son Mon Sect Declares Abstention from Politics.
- _____. 1963 (July 2). Superior Bonze's Letter and Vice-President's Reply.
- _____. 1963a (August 27). Theravada Sect Repudiates the Intersect Committee.
- _____. 1963b (August 27). Thich Giac Duc Appeals to Fellow-Buddhists.
- _____. 1963c (August 27). Hinayana Head Appeals for Calm and Order.
- _____. 1963d (August 27). Buddhist Leaders in Central V.N. Say There's No Religious Repression.
- _____. 1963e (August 27). Venerable Thich Tinh Khiet Declares Trust in President-Names Four Superior Monks to Handle "All Buddhist Affairs."